東京女子高等師範學校內
日本幼稚園協會

幼兒の教育

主幹
倉橋惣三

第二十三卷　第九號

圖畫教授法の新研究

東京女子高等師範學校教授
矢澤弦月・芳川趙
共著

舊套を脱した新しい圖畫の新研究であり、畫家、研究家、教職員諸氏の好參考書として生れた本書は、現日本畫壇の新傾向に對し、權威ある著者の批評は、我が畫壇に與へたる鋭き觀察と共に、縱横に、多年苦心の興味ある結晶の研究を思はす。

目次の中から

美學概論、藝術學概論、圖畫教授の實際、圖畫の批判。寫生の要諦、山水畫論、花鳥畫論、人物畫論、歷史畫論、佛畫論、水彩畫論、日本美術史、西洋美術史の各項は、實に著者に依つて初めて味ひ得る一大論文である。

□最新刊

四六版總クロース製
箱入寫眞版二十餘葉
價金三圓送料十七錢

東京上野寛永寺坂下公園
振替東京六四一一番
電話下谷三〇四七番

教文書院

十二年版

ローマ字第一讀本

理學博士 山口鋭之助先生
川副佳一郎先生 著

文部省檢定出願中

社會の進歩と共にローマ字の必要は、日に月に加はり、子供達のローマ字を求める熱望も漸次高まつて行くやうに思はれます。日本將來の爲め、此の際第二の國民たるべき一般少年少女達に、ローマ字の知識を與へることは極めて大切なことであると存じます。本書は最も完備した初學用ローマ字讀本として兩先生の苦心編纂に成れるもの、現に全國各地の小學校、補習學校で、ローマ字教科書として本年度採用學校數四百八拾六校、册數貳十三萬部の多數を印刷致しました。第二學期の兒童補習には是非御使用をお勧めします。

ローマ字第一讀本　價　金二十五錢
ローマ字第二讀本　價　金二十五錢
ローマ字第一讀本〔教師用〕　價　金二十五錢
ローマ字習字帖　價　金二十錢

東京上野公園寛永寺坂下（上根岸八十八）
發行所　教文書院
振替東京四六一一一番
電話下谷三〇四七番

日本幼稚園協會編輯幼兒の教育

會長　東京女子高等師範學校校長　茨木清次郎

主幹　東京女子高等師範學校教授　倉橋惣三

賛助員

（五十音順）

東京女子高等師範學校教授	嚴谷季雄	帝國教育博物館長	棚橋源太郎
東京帝國大學農科大學講師	醫學博士	內務省社會局部長	田子一民
東京高等師範學校教授	文學博士	東洋大學教授	高島平三郎
慶應大學教授	醫學博士	東京府女子師範學校長	龍山曉亮
東洋幼稚園長	岸邊福雄	文部省社會教育課長	土川五郎
早蕨幼稚園長	久留島武彥	帝國教育會理事	野口援太郎
帝國教育會會長	文學博士	京都帝國大學教授	乘杉嘉壽
東京市學務課長兼東京市視學長	澤柳政太郎	東京女子高等師範學校附屬幼稚園保姆	野上俊夫
東京高等師範學校附屬小學校主事	佐々木吉三郎	東京女子高等師範學校教授	醫學博士
東京女子高等師範學校教授	文學博士	東京帝國大學教授	文學博士
東京女子高等師範學校教授	文學士	奈良女子高等師範學校長	醫學博士
東京女子高等師範學校附屬高等女學校主事	醫學博士	奈良女子高等師範學校附屬幼稚園主事	森川正雄
東京女子高等師範學校講師	文學博士	東京高等學校長	湯原元一
大阪市教育部長	谷本富	東京帝國大學教授	吉田熊次
	藤井利譽		堀七藏
	藤五代策		松村武雄
	福士末之助		松本亦太郎
	富士川游		槇山榮次
	菅原敎造		三田谷啓
	下田次郎		
	佐々木秀一		

第二十三卷　幼兒の教育　第九號

目次

情操教育と藝術教育　主幹　倉橋惣三……一三二
東西洋の子守唄　文學博士　松村武雄……一五七
子供の生活と教育　文學士　河野清丸……一六五
子供の健康　天野誠齋……一六八
童謡　おほし樣　增水耕三……一七四
樂譜　お星樣　高澤隆……一七五
表情遊戯　お星樣　瑞穗幼稚園長　土川五郎……一七六
詩集　燥　橋爪健……一八二
童話　人が馬になる話　山崎みつ子……一八四
童話　BATA NO SHISHI　川副佳一郎……一八七
玩具　おもちや箱　東京女子高等師範學校講師　藤五代策……一九〇
萬國幼稚園協會案幼稚園要目（續）　本誌記者……一九三
長編小說　お春　東京女子高等師範學校教授　岡田美津……二〇二

恭西 樂叢 名曲粹

歌へ！
清らかに高く

マンドリン
獨奏集 1 價 .70
歌劇集 2 價 .70
獨習解說 3 價 .50

著
山杉高
本山木
芳春重
樹雄治

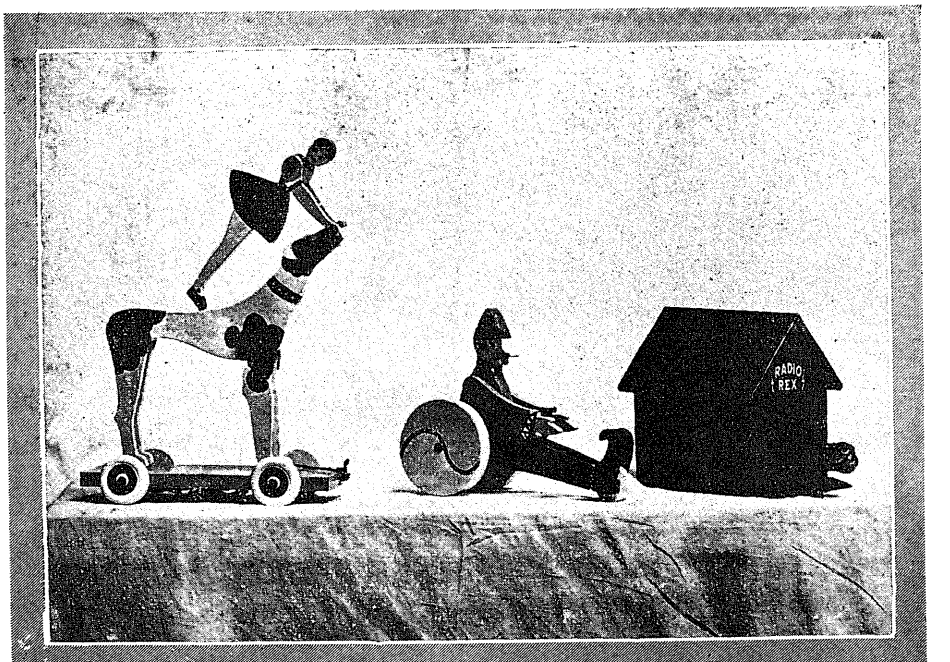
ヴァイオリン
獨奏集 1 價 .70
圓舞曲集 2 價 .70
行進曲集 3 價 .70

舞へ！
純眞な乙女よ

東京市上野公園 東寛永寺坂下 教文書院 振替東京四六三〇 電話下谷一七四

ルードヴッヒ筆

小鳥の巣



右端は手を拍つと空氣の振動で電氣を用ひて起し小屋から犬が走り出す面白い玩具
左（米國製）は二つの小孩が無邪氣な考案で生徒の教學科目に適する玩具。
これは小學校の教育上大切な事であるが、情操教育の資料に過ぎないものである。

東京女子高等師範學校內
日本幼稚園協會

幼兒の教育

主幹
倉橋惣三

第二十三卷　1923　第九號

情操教育と藝術教育

主幹　倉橋惣三

藝術教育とは近來我國に於て恰も一種の流行語のやうに社會一般に亙つて廣く稱へられてゐる言葉である。そして教育の一新方面を發見したかのやうに騷がれてゐるやうであるが、これは何も左程に騷ぐ程の新しい問題ではないのであつて、只教育者が幾分この方面の必要を感じ、目覺かけて來たと言ふに過ぎないのである。

藝術教育とは何である？　思ふに一般がこの言葉に對して有つ見解に似て而も非なる非常な相違ある二つの使ひのを發見するのである。

其の一つは藝術といふ言葉を遊戯氣分、道樂氣分、たわむれ、冗談のやうな意味で取扱つてゐる傾向であつて、もう一つは藝術といふものを極めて嚴肅壯嚴な心持に解ての使ひ方である。

吾國に於ては、どちらかと言へばこの第一の意味に用ひられてゐる場合が多く　隱居が骨董いぢくり、娘が三味線や長唄の稽古をするのと一般のたわむれ氣分である。それによつては人生の輕い氣樂な方面は味ひ得るけれども、眞面目な嚴肅な方面の心持を味ふ事は出來ないのである。

これと異つて同じく藝術といふ名で稱へられてゐても、ベトーヴエン、レンブラン等の藝術は實に嚴肅壯重、恐ろしい程の重々しさで我々の生活にせまつて來るのである。

芝居は大きな藝術であるけれども、我國に於ては演る者も觀る者も一般に之を大仕掛の茶番のやうに解してゐるから、

それは一つのたわむれの如き位置におかれてある傾がある。併し外國のオペラ等は觀客を樂ましめると言ふ事よりも人間の魂を高く向上せしめるといふ事を目的として行はれてゐるものが多く、同じく藝術といふものゝこの二つの差違程大きなものはないのである。されば吾人は藝術教育といふ言葉に對して以上の二つの意味のいづれに解すべきであらうか。

非藝術的な、無味な從來の教育に倦んで、所謂藝術教育が旺に提唱されるに至つた原因は何であるか、思ふに從來の教育はあまりに智的に偏し、情味、うるほひ、趣き、和ぎ等を失したる人間生活に遠いものとなつてゐたからである。智的教育はあくまで明瞭正確を尊ぶものである。然し明瞭であり確實であることは人間の生活を機械的ならしむる力を持つてゐる。生活を乾燥無味に導く力を有つてゐるのである。人間は畢竟人間である。情味、和樂の中に生き度い生物である。茲に反動として所謂今日言ふ藝術教育の必要が起つて來たのである 又從來の教育は單に智的であつたといふに止まらず、どこまでもそれが常識的、平凡的、便宜主義的の性質を多くもつてゐた。教育をうけることは賢くなることであるといふことであつた。而し單に賢くなるといふ事だけを目的とするならばまだ安全な方であるが、之を便宜的に、何とか世の中の交際が出來るやうにとか、或は教育さへしておけば生活に困るやうな事があるまい、といふ風な誤謬の下に出發した考へも尠くなかつたのである。

小學校令は「生活に必要なる智識及び技能を授くるを以て目的とす」といつてゐる、之は國民としての義務を穩かに盡して行けるやうに育て上げよといふことを示してゐるものであるが、然しあまりにこの言葉に囚はれて、一方に偏し過ぎたるが爲に、あるいは向上、崇高、偉大等の深味ある生活が特に缺けてゐた事は免れないのである。この反動として生れて來た今日の藝術教育とはいかなるものであらねばならんか、如何なる意味に解すべきであらうかといふことは實に重大なる問題である。

藝術を人生にうるほひ、情味を添へる緩和劑と解したならそれは實に輕い氣分を味ひ得る、寧ろ娯樂に近いものとなる

が、之を人間を向上せしむる刺戟劑と見るならば實に肩のいたくなる程の敬虔な氣持に壓迫されるのである。この二つの意味のいづれより見ても藝術教育は過去のあまりに常識的な、あまりに便宜的なる無味の教育より開放されて新しい生氣ある境裡に入らうとする點に於て一致してゐる。

平原を旅行する旅客は平凡的、便宜的、常識的である。勞する事は少ないけれども、どこまで行つても仰ぐものがないといふ點から遂に倦怠を生ずるのである。そして人間はその倦怠にいつまでもたへ得ないでついに焦燥するのである。その時眼前に屹として聳ゆる連峰の雄姿を發見する時旅客はその偉大なる姿に壓せられて駭きの目を睜るであらう。そして過去の平凡なる行程から急に開放せられるのである。この山岳は即ち藝術である。偉大なる藝術に觸れた時人間の魂は大きな壓迫を感ずると共に、それは次第に淨化されて行く。そして窮屈な智的の生活から外れて空高く飛躍し、次第に向上するのである。藝術教育とは如上の意味をもつものでなければならない。現在では單に智的に偏したる教育生活に倦怠を生じたる結果、この生活からのがれて、もつとのびやかな、うるほひある、情趣豐かな趣味の教育を求め、實に和い氣分に浸り度いとの希ひ、これを藝術教育と言つてゐるが。これだけではのびやかなる階調の生活にまで延び得たといふに過ぎないのである。互ひに面白く可笑しく暮らせるいふに過ぎないのである。同じく開放されたといふものゝ以上二樣の人の心に及ぼす結果には非常な大きな差違を見出すのである。吾人はこの後者を以て藝術教育といふ名を冠する事は適當でないと思ふ。藝術教育とは何かもつと他のものでなければならん。藝術教育と對比して今日一般に言ひ行つてゐる所謂「藝術教育」は「情操教育」と言ふ方が適當であらう。然し情操教育とは如何なるものであらねばならぬか、その考察は他日に讓り、玆では情操教育に關する問題は暫く措き、一般が藝術に對して持つ見解及び藝術教育とは如何なるものでなければならんかと言ふ概略に就て少しく述べ筆を擱くことにしやう。

世には自分が持つてゐない、自分が到底達する事の出來ない高い藝術に接する時、その藝術を自分のひくさにまで引き

下げて批判を下し、それでゐて平然としてゐる人がある。世の中にはそんなに高いものがある筈がないといふ信條を以て、要するに大したものではないと斷定して仕舞ひ、若し自分の持つてゐるものと違つたものを見出すと、向ふを間違ひと定めてしまふ質の人である。この種の人と共にある偉大なる音樂を聽いた後『如何でした？』と質問して試る。その答は『結構でしたね』とくるか或は『大したもんぢやありませんね』とくるかであらう。『結構でしたね』といつても、それは自分がその高い藝術を解した上での答ではなくて、自分の低さにまで引下げての言葉である。もう一つの答は自分のわからないものは、向ふが間違いであると決めての言葉である。宗教の話などを聞くときに一ばんよくこの種の人を見る事が出來る。

次には如何なる偉大な藝術に接しても直ちにその藝術に容易に乘つて仕舞ふ人である。この種の人はある偉大な繪畫とか音樂とかの藝術に接してゐるその時間だけはたしかにその魂は向上されてゐるに違いないのである。然し一度その時間が經過して仕舞へば自分は元の姿にかへつてゐるのに氣がつかないで、別の時までも矢張り己れは高い人間になり了はせた氣でゐる人である。丁度富士山の頂上をきはめた人が下山して後も尙乃公は富士山より五尺高いと威張つてゐるやうな滑稽さがある。然しこの無邪氣な幻覺は自分を高め行く經路として差支ない事であらう。

第三にはある高さの藝術を解し得る人が、自分は何かしら高くなつたやうに氣持がし度い爲に、ものを見下げなければならないやうな氣持になる人である。つまり見下げる物がなくては己れの場所にひけめを感ずるのである。それが爲に繪畫や音樂等の藝術に何等の經驗をもたない人のもとに行き、自分の見下げるものを求めるのである。この種の人は非常に傲慢に見ゆるものである。

一體山岳雄峰は登る爲に存在するのか、仰ぐ爲に存在するのかといふことは問題である。若しそれが頂上を窮めることによつて價値あるものとすれば、あの宏大無極の蒼空は吾人に何らの價値なきものとなるであらう。たれか天に上つてそ

の高さを知つたものがあるであらうか。私の爲には山は仰ぐべく非常な價値を持つてゐる。高大なる山の麓に達し『アゝ世には實に高いものがあるものだなあ』と感ずると同等の嗟嘆は崇高なる藝術を見上げる時に出づるのである。藝術の極致は人間の心に影響して謙遜の美德を培ふものである。吾人は眞の藝術教育とはこの意味に於ける藝術教育であり度いと思ふのである。そして、只單に藝術教育をして人生に裝飾を與へる程度のものとして考へゐるならば、それは道樂教育、たはむれ教育に近づく危險がある。若し道樂氣分たわむれ氣分でやる教育を藝術教育と解したなら、眞の藝術の問題を研究するに際して非常な邪魔をするのである。眞に人間を向上せしめるものをのみ藝術教育とは言ひ得るのであらうと思ふ。（文責在記者）

擴張か充實か

K　M　生

義務教育延長を實施せよと叫ぶ教育者經世家の聲は漸く當局者の頭惱に反響してその必要を認めるに至つた。來るべき第四十七議會は最も重要な問題の一として取扱ふであらう、結構なことです。だが持つて下さい。徒に空疎な形式上の整備擴張ばかりに焦慮したとて何にもなりますまい。極度に弛緩した、行詰りの極にまで達してゐる今日の國民教育を、單に年限を延長したばかりで我教育界の進歩だと思つたらそれはとんでもない間違のもとでしやう。刻下の急務は教員の素質の向上と、教授訓練の緊張とを圖ることではあるまいか。空つぽの風船玉はふくらませばふくらます程內側の空虛が見透かされるものです。

東西洋の子守唄（下）

文學博士　松村武雄

親の心は――殊に母親の心はいつも子供に繋がつてゐる。母親の胸は、子供の歡喜と悲哀、幸福と不運、健康と疾病、その他あらゆる善きものと惡しきものとの、子供の心身の上への顯現に對して、觸れるとすぐにはじける鳳仙花の實のやうに、若くは觸れるとすぐに葉をとぢる眠草のやうに、鋭敏に微妙に感じ動いてゐる。母の感情は一種の Pendulum である。吊された振子である。それは『子供』を中心として、絶えず喜びから悲しみへ、安心から不安へと搖れつづけてゐる。だから子守唄には、あらゆる災厄、あらゆる不幸、あらゆる疾病から、おのれの子供を保護し解放しようとする母の希求が、濃厚に鮮明に滲み出てゐる。

西洋では、子供の保護者、幸福歡喜の授與者として、さまざまの聖徒が現れる。それからサンタ・クロスお爺さんがゐる。いなこの髯の長い福々しいお爺さんも、實は聖徒の一人であつた。サンタ・クロスといふ名は、セーント・ニコラスの和蘭訛であらうと言はれるからである。セーント・ニコラスでは、子供の伴侶として保護者として、全く餘りに硬すぎる。嚴めし過ぎる。いな名前ばかりではない。その性情行動も、基督教の聖徒それ自身では、餘りに嚴肅に過ぎる。子供の心と生活とに對して、高すぎる。サンタ・クロスお爺といふ一個の好々爺に變形させられて始めて子供とぴつたりと融合するやうになつた。自分はこの Metamorphosis の過程と產果とを太だ興味があると思つてゐる。それから歐洲ではまた神や基督や聖母マリアが、子供の保護者恩惠者としてよく子守唄に拉し來られる。西班牙の Gubernatis 伯爵がその著 Usi Natalizj

のうちに收めた同國の一個の子守唄に

マリアさまの赤ン坊（基督のこと）
まだまだ搖籃お持ちでない。
お父さまは大工だに、
今に搖籃が出來るだろ。

セーント・アンナのお伯母さまが
セーント・ヨキムのお伯父さまが
二人で搖籃ゆりなさろ、
クリスト樣が眠るように。

そこでわたしの赤ン坊も
私の大事の赤ン坊も、
眠つておくれよ、マリアさまと、
神のお子さんがついてゐるぢやに。

とある如き、若くは獨逸のハイデルベルヒの子守唄の一つに、

ねんね、赤ン坊、ねんねしな
お前のお父さんは羊飼

お前のお母さんは、外へ出て
樂しいお夢が降つて來る
木の枝摑んで搖つてゐる。
ねんね、赤ン坊寢んねしな。

ねんね、赤ン坊、寢んねしな。
空は羊で一ぱいだ。
星はみ空の小羊で、
羊飼のお月さんが世話してゐる。
ねんね、赤ン坊、寢んねしな。

ねんね、赤ン坊、寢んねしな。
クリストさまも羊持ち、
いえ、いえ、自分が神の小羊だ。
そしてこの世を救ふため、
死んで行かれた、クリストさまが。
ねんね、赤ン坊、寢んねしな。

とある如き、その好適例である。

基督教國がかうした宗教的人物を、子守唄に拉し來つて、子供の保護を托するやうに、異教の信奉者は、古典的な超自然的靈格に同一の役をお願ひする。最も美しく最も優れた異教――ゼウスやアポロンやアテナを持つ宗教を生んだ希臘人の子孫は、今日では大部分は基督教化されてゐるのにも拘らず、素朴な田舎人の間には　依然として古典的な三人の『運命の女神』――一人は人間の命の絲を紡ぎ出し、一人は命の絲を引きのばし、一人は鋏で命の絲を斷つといふ三人の運命の女神が生きつづけて、子守唄の中に、子供保護の役をふられてゐる。

日本の子守唄にも、さまざまの保護者や恩惠者が見出される。最もポプユラーなのは、地藏尊であらう。それから七福神のあるものも、この光榮を荷ふことがある。わけて興味の深いのは、鬼子母神である。人の子を捕へ食つて、親々に痛ましい悲嘆と恐怖とを與へてゐた此のAsiEな一女神が、阿彌陀如來におのれの子を隱されて、憂悶のあまりに、飜然開悟して、人の子の熱心な擁護者に變じたといふ傳承は、佛典の扱歪した形式ではあるが、子守としての鬼子母神になつかしいロマンチソクな味と色調とを與へてゐる。

かうしたさまざまの性格を拉し來つて、積極的に子供の幸福を增進することを希求した親々は、またさまにまの手段によつて、消極的にあらゆる災厄からおのれ達の子供を免れさせようと希求する。その希求もまた端的に子守唄に反映してゐる。

厄災の最も大きなものとされたのは、低い文化階層の常則として、魔術や呪巫であつた。それ故これ等のものが放射する幻怪にして恐ろしい力から子供を自由にするといふことが、親々の最大の關心事であつた。そしてこれ等の魔力を驅除すべきさまざまのものが考へられ求められた。カラブリアの民衆は蛇の脱殼が魔法を拂ふ効能を有するとして、夜毎子供の枕の下に敷くことを忘れなかつた。スコットランドや伊太利の人々は、火に大きな清淨力を認めて、子供の傍に之を燃

やしつづけることを怠らなかつた。羅馬希臘、印度、稀には日本及びその他の國々では、唾液に妖魔を撥無する力を認めて、ことごとに子供の傍に唾を吐いた。ペルシウスが羅馬の親々の子供に對する迷信的な心づかひを描いて、

『祖母若くは迷信深い叔母は赤兒を搖籃から取り出して、その額や唇に、清淨力を持つ唾を塗つて、災厄を防いだ。それは惡魔の邪視を斥ける効能を持つてゐることを知つてゐるからだ。』

かくてこれ等のものがまた屢々子守唄のうちに隱見するのは、頗る自然な心理的歸趨と云はなくてはならぬ。

親々の大きな望は、その兒女の成長にかかつてゐる。彼等の老の至るを忘じ了して、子供の生立を樂しむ。健かに生ひ立つだけでは滿足が出來ない。女兒ならば、花の如く美しく、男兒ならば太陽の如く輝やかに、獅子の如く强く生ひ立たんことを欲求する親の目から見れば、子供は全能である。恐るべき潛在的勢力(ポテンシャリティ)である。どんなものにでもなり得る伏能力を持つ靈能的存在である。かくて親々は子守唄を通じて、おのれの子供の未來に、あらゆる善きもの、あらゆる高きもの美しきものを求めようとする。子守唄はある意味に於て、『親馬鹿』の美しく優しい展開境である。ルーマニアの一個の子守唄に云ふ。

ねんね、小さい赤ン坊よ、
そならはお母さんの秘藏ッ子。
お母さんはそなたを護りましよ、
お母さんはそなたを搖りましよ。
『樂し嬉し』の花のやうに、
白衣(びやくえ)のつけた天使のやうに。

お母さんとねんねよ、お母さんと。
どんな呪もかき退ける
呪文をお母さんは知つてゐる。
わし等の殿樣と同じやう
そなたは英雄となつておくれ、
軍に强く手も强く、
それでお國を守つておくれ。

ねんね、赤ン坊、ねんねしな、
神はそなたを祝ふだろ
體は黑く、目はつぶら
空照る星と輝けよ。
乙女の愛はそちのもの、
そなたが歩く足もとは
綺麗な花が生り出でよ。

と。これ男の子に對する親々の甘い、そして美しい幻想的願望の發現ではないか。更にモツヴィアの一個の子守唄に云ふ。

ねんね、娘よ、ねんねしな。
そなたはお母さんのあらせいとう（草花の名）

お母さんは側にゐて、搖りましよ。
日燒せぬやう焦けぬやう、
そなたの體を氣をつけて
きれいな泉水で洗ひましよ。

ねんね、かあい子、寢んねしな、
あらせいとうと生ひ立ちな、
樹液のやうに色白で、
柳のやうにすんなりと、
じゆずかけ鳩のやうにおとなしく、
み空の星のやうに可愛かれ。

と。これ女の子に對する親々の伴りのない、そして外目には可笑しと見ゆるまでな願望の活寫ではないか。

子守唄は母の心の影と聲とである。子供に對する母性愛の微妙な旋律であり形相である。だから他の種類の童謠が自然を觀じ動植物を觀じ生活を觀ずるに反して、子守唄に於ては子供——そして『わが子』が觀ぜられる時に自然や動植物等が現れても、他の種類の場合と異つて、それらは決して第一義ではない、主役ではない。あくまで子供が主役であり、核心的な Figure であつて、自然や動植物はそれを飾り、それを活かすための道具立に過ぎない。他の種類の童謠が、子供の心そのものの動きを傳へるに對して、子守唄は主として親の、母の心の動きを傳へる。

然るに子守女といふ一個の Geschäftig なものが生れるに及んで、子守唄は親の心、母の心の響から遠ざかつて、子守女の心の響の宣傳者となつた。親の心、母の心が子守唄の中心生命であつた限りは、そこに搖ぐ心的芬香は、子供を中心として香つてゐた。子守女の心が、子守唄の主調となるに及んで、そこに動くものは、子供を離れて、子守女の對社會的若くは對傭主的情緒であるやうになつた。即ちそれ等の子守唄に於ては、

『よく眠らなければ、私がお母さんに叱られますよ』

とか

『さても子守ほど、つらいものはない、うるさいものはない。』

とかいふ感情の動きが主題となるやうになつた。吾人はこの種の子守唄を目して、眞の子守唄からの、派生的な產物であり、第二義的傍系的な產物であると考へる。從つて當面の考察からは除外することにして、これで子守唄の小やかな考察を了へる。

幸福な、幸福な二度とは返つて來ない幼年の日！　それを愛しその記憶を慈しまないといふことはどうして出來よう。それらの記憶は魂を新しく、高くして、こよなき享樂の泉として私の爲に役立つのである。

（トルストイ）

子供の生活と教育

文學士　河野清丸

教育は被教育者の發達の段階に相應したる生活をなさしめ置き、之を合理的に指導することによつて最も効果を擧げ得るのである。幼稚園、小學校初年級程度の子供の教育に對しては殊に之が適切な問題であると思ふ。現在の學校教育はとかく社會及び家庭と全然没交渉な一劃をなした別世界の如き觀ある教育に偏する事が尠くないのである。教育者は餘程この點に留意して自ら反省し、教育そのものゝ根本義を逸セざるやうにすべきである。教育はどこまでも生活を中心とした教育でなければならない。換言すれば教育即ち生活であるべきを必要とするのである。

されば吾人は如何にして子供をその個々の生活より合理的に誘導して教育の効果を實現すべきであらうか。それには先づ子供の生活を詳さに洞察すべき必要がある。かうした研究の結果吾人は子供を誘導するに際して大體次の三方面より入るを最も上道かと信ずるのである。

子供には自己の必要からものを作成しやうとする創作慾がある。だから吾人はこの心の働きを善導して生きた教育をなさねばならん。

ルソーは『予はかつてゐる幼稚園を訪門した際、適々一幼兒が熱心に自分のノートの上に自分の頭文字を幾つも幾つも書き並べてゐるのを見た。ふしぎに思つてよく訊してみるとそれは自分のマントの襟につける爲に名前の頭文字を練習してゐるものと知れた。兩親や姉が教へてくれない爲に、幼兒自身でそれをなさうと努力してゐるのであらうが、これを見

て予は子供が如何に自己の必要から爲すことに熱心であるかといふことを知つた』と言つてゐる。

私の學校(東京女子大學附屬小學校)では全生徒中和服が二パーセント位であとは全部洋服でやつて來るが、その爲最近上級生には洋服の裁縫をすゝめてゐる。つまり子供自分達の着るものが洋服であるのに日本服ばかり縫ふことはその必要から起る滿足を與へないのみならず、一面趣味を失ふことにもなるからである。學校で子供にカレンダーなどを作らしめて自宅に持ちかへらすことなども家で使用するといふことの必要を感ずる、その要求を充たす目的を以てやるのである。

マクマレーであつたか「人生教育の目的には一般目的と特種目的との二つがある」と言つてゐる。一個の文章を書くとしても、それを思想を他人に傳達する爲或はそれを保存する爲に書くとすれば、これは一般目的の部類に入る。特種目的とは友達を案内する書簡又は時候見舞、病氣見舞等の類を言ふ。一般目的は抽象的で特種目的は具體的であるとも言へる。學習的には特種目的を以てするのが必要の原理である。

子供の教育は可成その趣味に適した教育の仕方であらねばならん、そうでないと子供は乾燥無味なその教育から倦怠を生じて仕舞ふのである。しかしこれは現在の如き準備教育即ち他日の目的の爲にする教育と屢々相容れない所があるから當事者は餘程考慮すべき問題であると思ふ。

又子供の教育には子供の能力に適するといふことを考へなければならん。如何に必要があつても、興味があつても能力に適しないしごとはかへつて子供を害するものである。

モンテソリーは『子供にアパラタス(三歳位から七歳位までの子供の感覺教育に用ふる道具)を選ばしめるとき四歳位の子供が七歳位の子供のもつやうな道具を選んでも敢て干渉はせずに置く。選擇を誤つても咎めないで置く』と言つてゐる。

すれば子供はその道具を使ひきれなければすぐにやめて他の方を選ぶからである。子供はその間に出來ないといふこと

を體驗する。だから幼稚園などの子供は能力に適しないものを選んでもあへて咎めなくともよいが、指導するものゝ頭には常に子供には能力に不適當なものをやらせないといふ考へは持つてゐる必要がある。そうでないと子供にはじめた仕事に對して根氣がなくなるやうな性質を培ふことになるからである。ましてや教師が課してやらせる仕事などは餘程この點に注意しなければならない。そしてこれを段々連續的に發展せしめていかねばならん。子供の能力は年と共に進展して行くから子供自身の選ぶ道具や仕事も自ら複雜になつてくる故、教育者はつねに之を念頭に置かねばならん。

繪畫や文章など、子供の成績品を評價するにも低きより高きに漸進的に標準を高めゆく必要がある。「夏の夕方」と稱する課題の作文に對して秋の夕暮や、春の夜などの氣持が出てゐる文章を吾々は題外れと稱してゐるが、そうでない限り我々は、初めの中は子供の作品は單に題に叶つてさへおればそれでよしとする。而して漸次その標準を進めて文章ならば敍述の順序、それが出來たら文藝的文辭の使用、冒頭、結末等に注意する。つまり標準をだん〳〵精密にすることである。かくすれば初めから六ケ敷いことに逢着せぬ故文章は六ケ敷しいものである、手の出せないものであると言ふが如き臆病になることはない。そして子供の心に自信をつける。かくする一面にあつては教師は子供の文章にいつまでも朱點を入れてやるから子供は、容易しいものだが仲々到り難いものであるといふことを自覺する。そして慢心も起さず、自棄にも陷らないで樂しく勉强するやうになるのである。一般家庭の父兄にあつては實に急進的に智識の注入しやうとし、それが爲に子供の進歩を阻害し、自信を害ひ、あたら子供をいぢけさして仕舞ふやうなことは屢々見聞することであるが、これは教育者、保護者共に大いに警戒すべきことである。（文責在記者）

子供の健康

天野誠齋

健康法の先生

小兒の健康を保ち、また家族一同の健康狀態について、尤も簡單なる方法で、夫れを確かめる事が出來ます、即ち體重を量つて見ることで、小兒でも――大人でも――體重が減るやうでは、健康なものと認められぬことは申上る迄も御座いません。

處が日本の家庭では、健康の標準を遺憾なく見出すことの出來る、大切な秤といふものが備へてありません、秤でも備へて置いて、體重を計るのは、醫者の診察所に限るやうな考へをもつて居ますが、之れは小兒の保育上並に家庭衛生の上から觀ても大なる缺點であらうと思ひます。

然らば此の秤は非常なる高價のもので、何人の家庭にも容易に得られぬかと云ふと、決して爾うでありません、よく醫者の診察所に備へある秤は十八貫目までかゝりますが、那れで價は二十圓としないさうです、二十圓内外もする金を秤にかへるのはと、躊躇なさるお方もありませうが、假りに御婦人の帶一筋を儉約になつたら、左のみ主人公を煩はさずとも容易に買うことが出來ましやう。

帶も大事なもので、新調を望むのは、御婦人として御尤もなことですが、一個の秤を備へて置けば、愛兒は申す迄もなく、御家族全體の體重を量つて、お互に其の健康を喜ぶことも出來ましやう、又體重の減じたときは、お互に衛生上の注意を促し、豫め疾病の豫防をなすことも出來ましやう。

夫れに暑い時季には、衣類を脱いで裸體になる機會も多

も多く、小兒などは目方を量つてやると申せば、非常に喜ぶものです。

氣候が熱つい時節、行水でも浴びて、家族一同の體重を量つて見るなどは、健康の如何を顧みると同時に、また之れは興味のあることでしやう、殊に小兒などは、健康で食事も運動も十分であれば、體量は次第に增るばかりです、詰り一週間に一度づゝはかつて見ても

『今度は何の位目方が增えたか』

といつて小兒は夫れを樂しみにするものです。

夫ればかりではなく、夏になると、何人も體重の減り易いもの故、攝生を重んずると同時に、體重を量つて置く必要を生ずるものです。

家庭に一箇の秤があつたら、如何に便利で、且つ健康上の參考になるか知れません、又一箇求めて置けば、無暗に破損したり、狂つたりするものでないから、修繕の費用など左のみは要しません。

子供の腸の重疊

『食後は安靜に』

子供でも食後は三十分間ぐらゐは安靜にしなくては不可ません、御飯を食べて直ぐ激烈な運動をするのは、身體の爲めに甚だ宜しくありません。

殊に小兒が遊びに耽つて居るときは、落付いて御飯を食べないで、急いで掻つこむやうに御飯を食べ、再び表へ飛出して前からの遊びをつゞけ、飛んだり跳ねたりして、元氣に任せて激烈な運動をするのであります。

之れが子供にとつては、實に危險千萬なことで、どうかすると取返しのつかぬ、飛んだ破目に陷るのであります。故に食後における子供の取扱ひは、成るべく安靜を保つ習慣をつけねばなりません。

玆に子供が食後直ちに激烈なる運動をした爲めに、遂に一命を失ふに至つた實話があります。

『急病になつた七歲の娘』

醫師の招かれた家の子供は、七歲になる可愛らしい女のお子さんでありました、前日迄は何事もなく、其日になつて急に惡くなつたので、病氣は次第々々に惡くなるばかり

です、醫師の診た時分には、容態はモウ大分危險狀態に迫つて居ました、御兩親や御家族の方に對しては如何にもお氣の毒なことですが、最早萬に一つも助かることは出來ますまいと云ふ、診斷であつたさうです、さうして其の子供さんの病症は

『腸の重疊』

といふのでありました。

腸の重疊といふのは、どんな病氣であるかと云ふに、腸が疊まり合ひ、重なりあつて、遂には腸管が閉がつて仕舞ひ、便が下へ通ることが出來なくなる病氣であります、之れを癒すには手術をいたすより外に方法はないのです。

どうして此の子供さんは、こんな病氣に冒されたか、こんな生命に關する大變な病氣になつたかと申しますと、他に何んにも原因があつた譯ではないのです、病氣にかゝつた前の日に、俗に、アボシと云ふ小さな魚の干したのを例日より少し多く食べ過したやうであつたと　御兩親は仰しやつて居られたさうです、けれども夫ればかりでは病氣になる譯はないと云ふので、醫師は能く〳〵お尋ねしたら、此のお子さんは御飯をたべてから、直ぐに戸外へ飛出して激烈なる運動を續けられたと云ふことでありましは、病氣の原因は、

『此の食後の激烈なる運動』

にあつたのです、さうして可愛さうなことには、遂に其の翌日は救ふべからざる運命に陷つたのであります。

『親々の注意』

食後の激烈なる運動は、是非之れを止めさせなければなりません、今申したやうな取返しのつかぬ。

『腸の重疊』

とか、或は

『腸の捻轉』

と云ふやうな病氣にかゝる虞れがあります。

腸の捻轉といひますのは、腸の重疊と同樣で、之れは腸が捻れて、ヨレ〳〵になることであります、之れも腸管が閉がつて、便が下へ通らなくなつて仕舞ひ、煩つた方は大變に苦しんで、早く之れを發見して手術をしても、助からぬ場合が多いのです。

何處のお子さんでも、何んの氣もなく、食後飛んだり跳ねたりする方があります、親御さん達も元氣だから宜いと其儘打捨てゝ置く方がありますが、之れは十分氣をつけなくては不可ません。

母親のお給仕

『遲飯の習慣を』

子女九人を養育されたお母さんの食事其他について實驗されたお咄しを茲に記すことに致します、九人のお子さんといへば隨分子福者なお方で御座いますが、其の御面倒のよく行屆いたのには感服いたしました。

其のお母さんの仰しやるには、食事の時なども大勢の子供ですから、隨分賑やかで、大きな食卓を造つて夫れを食堂に据え、子供を其の周圍へグルリと座らせます、お菜は各自に盛分けにして遣り、親の與へたものに對しては彼是不服を唱せぬ事にしてあります、萬一お菜の選り嫌ひを致すものがあつたら、直に食事の座を去らせ、其の時だけ喫飯を許しません、食卓の傍には私が附添ひ、下婢にお給仕をさせる事は禁じて御座います。

下婢にお給仕をさせますと、自然子供が我儘ばかり申して、悪い習慣を付けるばかりでなく、子供が遊戯にでも屈托して居ると、良く咀嚼もせず、急いで鵜呑みにいたし、戸外へ飛出します、此事は平生良人から矢釜しく訓しめられますが、夫れには母親が食卓の世話をして、お給仕をしてやらなければなるまいと考へ、子供の多くなるに從つて、斯樣に改良をいたしたのです。

夫れに早飯の習慣は、子供の遊戯に耽る時ばかりではありません、子供によつては、急燥（せっかち）な性質もあれば、冷靜（おちつい）たのもあつて、何うしても急燥だと、御飯までも、緩くりと喰べては居りませんで困ります、私共では子供の遲飯は構はない事にいたしてあります、一箸喰べてはお咄しをしたり、一碗喰べたら、學校の事を語合つて居りましても、夫れには更に注意を與へませんのです、お話し仕乍ら、愉快にたべますことは、咀嚼をよくして、お腹の落付きも良し、自然消化もよいさうです、夫れに食卓を離れるときは、大抵一齊に立つやうにしてあります、此通り食事の時の監督

は責任が重う御座います。

『食事の訓練』

嘗てビスマークの母親が、食事の訓練を與へたと云ふお咄しは取分け感心致しました、ビスマークの小兒時代は極めて早飯で、碌に咀嚼せずに周章て、鵜呑みをしますから、母親は此の有樣を見て、之れは衞生上甚だよくないが、此の惡癖が習慣となつたなら、必ず健康を害するであらうと氣が付いたさうです、ソコで種々工夫を廻らした末、小さな紙片へ犬や猫や、美しき花などの繪を記し、夫れを幾重にも、幾重にも、小さく疊んで、夫れをまた疊紙へ入れて食卓の上へ置かれました。

先づ之れで一切の準備が出來たのです。

さて愛らしきビスマークが食卓に就くと、例の通り、慌しく箸を執ります、ソコで母親は一箸たべると傍の疊紙を取り、

『此中に面白い繪があるから開けて御覽』

と云ひます、一著口に入れたビスマークは、箸を置き、モグ〳〵咀嚼ながら幾重にも疊んである繪を開き、皺を延して見ると、動物だの、花だの、いろ〳〵な珍らしいもの、美しいもの、愛らしいもの、などが出ますので、非常に興を催し、一箸食べては疊紙をあけ、爾うして咀嚼を致します。

母親は永らく斯くの如き丹精をこらした結果は、遂にビスマークをして、遲飯の習慣をつけ、良く味つて、食事する樣になつたさうです、が之れは大に子供の食事に對する參考とすべき教訓で御座います。

『お辨當は食麵麭』

小學校へ通ふ子供が四人になりましたとき、私は考へました、お辨當は餘程注意してやらないと、子供の爲めにならないと、夫れから育兒の御經驗のあるお方にも折々うかゞつて見ますが、餘りよい考案がなくて困ると仰しやつてゞ御座います。

私も之れには隨分困りましたが、矢張り食麵麭が一番可いやうに思ひまするし、夫れに子供も食事の時間に世話がなく、簡單に喫べられると云つて居りますのでお辨當は食麵麭と定めて置きました。

先づ半斤の食麵麭を、竪に三切といたし、爾うして白砂糖と、お醬油と等分位にしたのを、鍋でかきまはしながら、煮詰めて、ドロ〳〵になる、夫れを一切づゝに塗つて、持たしてやりますけれど、毎日是ればかりでは飽きますから、一週間二度位づゝ、果實のジャミを附けて遣つたり、或は肉などを入れる事にいたします。

郊外の散策は東京住ひの小兒には、尤も必要な運動だと申して、良人も常に之れを奬勵して居ります故、一ヶ月に二度位づゝ、日曜日には小兒を連れて、良人が先立ちで郊外へ出懸けます。

連れて參る小兒は學齢に達したものばかりですが、此の旅行の服裝並に用具は、自身必ず前夜洩れなく整へ置く事に決めて御座います、翌日出懸けの時になりまして、一品でも手落ちがありますと、一緒に參ることが出來ない規定ですから、子供達もよく之れを承知して居て、此の一行に洩れないやうに注意します。

お辨當は海苔まきに、食麵麭が普通で御座います、夫れに水筒を一箇づゝ用意いたし、沸冷しの水を之れに入れておきます、お辨當と水筒は銘々子供が脊負いますが父親も其通りにいたします。

服裝は洋服で、脚袢、草鞋がけといふ扮裝(いでたち)です、郊外と申しても汽車にのつて隨分遠方まで參りますが、何時も必ず日歸りに致します。

總武鐵道で、成田まで參り、成田から佐倉まで三里位は御座いましやうか、其の間を徒歩で往復いたしたさうです、お辨當をつかひますのは、大概途中の山林とか原野で御座います。

空氣の新鮮なところで、運動をなし、空腹を充すのですから、子供達は非常な悅びで食事をいたすさうですが、歸つて來て、そのお咄しを聞いたばかりでも、嘸愉快なことだらうと共に嬉しう御座います。

斯ういふときは遠足からの歸り時間は、夜の八時頃になりますから、夕飯は途中で一同軍鷄で御飯を喰べたと申します、歸宅してから入浴を濟ませ、夫れから衣類などは自身に整理させて床に就かせます。

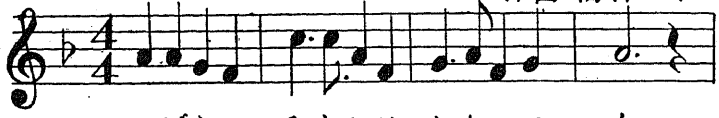
童話　お星様

増永耕三作

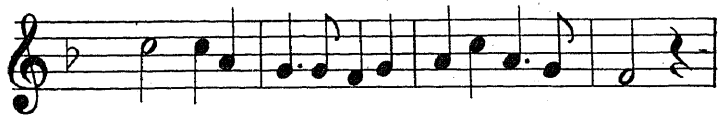
東の空には
青い星
西の空には
赤い星
青い星も
きらきら
赤い星も
きーらきら
きらきら星の
かあ様は
あの十五夜の
お月様。

お星さま

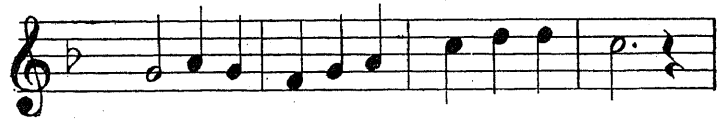
作歌 増永耕三
作曲 高澤　隆



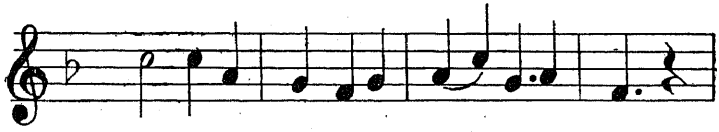
ひがしの　そらには　あをいほ　し



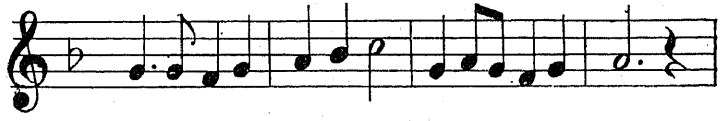
にしの　そらには　あかいほ　し



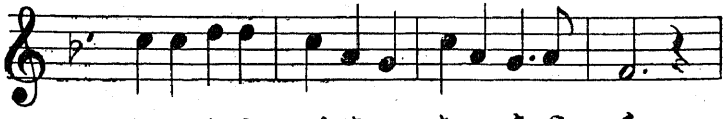
あ　を　い　ほしも　きらき　ら



あ　か　い　ほしも　き―らき　ら



きらきら　ほしの　かあーさま　は



あのじう　ごやの　おつきさ　ま

表情遊戯　お星さま

振付　土川五郎

第一圖

（一）

東の　右へ三歩

空には　右上方を眺む

（二）

青い　右肱を曲げ食指を肩の方へ近づく

第二圖

（三）

星　肱を少しく延ばして食指にて右上方を指す

西の空には　左方へ同じくす

赤い星　「青い星」に同じく左手にて行ふ

第三圖

第四圖

（四）

青い

兩手を兩側より頭上に上ぐ

（五）

星

五指をまとめ體前より下ろし更に右足を斜右方に出し兩手を右上方に運ぶ

第五圖

（六）

も　にて五圖の姿勢のまゝ
　　兩手の指を開く

きいらきら　五回兩手を左右に回
　　轉す

赤い星も
きいらきら　「青い星」以下の同じこ
　　とを左方に行ふ

第六圖

（七）

きらきら星の　兩手を（開掌のまゝ）
　　左右に開き手頸をま
　　はしつゝ左回轉す

第七圖

第八圖

（八）

かあさま　左手を上げ左上を見る

は　右手を上げ右上を見る

（九）

あの十五夜の　左足一歩前に足を揃へ両手を頭上にあげ

第九圖

（十）

お月さま　右足一歩左へ體の重みを右足に託し、兩手を左右に開き、手先を自然に垂れ右上を眺む

第十圖

表情遊戯　お星さま

＊　＊　＊　＊

小さきものゝ反逆の言葉

叱かるのは憎らしいからでしやう、擊つのは憎くらしいからでしやう。

叱かつたり、擊つたりするから、御前がよい人になるのだ、御前が可愛いゝから叱るのだよ、擊つのだよ……それは嘘です。

よくなるのは憎くて叱ることの、擊つことの生む偶然的の副産物でしやう。よくしやうとて意識的にするのではないでしやう。それは事實でしやう。矢張り本能の一方面でしやう。（KM）

＊　＊　＊　＊

焦燥

橋爪健

私はよく知つてゐる
仕事に夢中なあの神にさそはれて
うつうつと寢入つた處を。
おゝ此の樹の匂はしい蔭
私はいつも玆に來ては俯仰し
好ましく思ひに耽りつゝ
何かしら肋を撫で骨をさぐりたく……
あの甘い假睡の間に
自分に肖せて造られたといふ

一人の優しく妙なる存在を想ひ想ふと
あゝこの抜きとられた胸のあたりに觸りつゝ
擽られるやうな羞かしいもの戀しさの
抑へても壓へても衝きつのり

光る顆を隈どる影のやうに
匂ひ深くも身をはなち
名も知らぬ姿も知らぬ
たゞ一人の幻をば抱きとり抱きしめ
その纖やかな肩を搖り訴へるけれど
物も云ひでぬもどかしさに泣きあぐみ
泣きあぐみ、現ともなく
指にもつ莖もいつか折り盡し
淋しさは又風のやうに
眠りを呼ぶ。

童話　人が馬になる話

山崎みつ子

北の國のお坊さんが、丹波の國の山路を旅してゐました。だん〳〵と歩いてゐるうちに、谷間の廣い野原に出ました。

『はて、こんなところにこんな廣い野原はなかつた筈だが。路に迷つたのか知ら。』

と、お坊さんはぼんやりあたりを眺めてゐますと、後の方から商人が六人急いで來て、

『もし〳〵この道を參りましたら、どこへ參るでございませう。』

とお坊さんに尋ねました。

『さあどこへ出るでせう。實は私にもわからないゐるところや。一體このあたりにこんな野原があつたかな。』

と、お坊さんが獨言のやうに言ひました。

『いや存じませんよ。どうも道に迷つたやうで……』

と、商人たちは答へました。

『何しろ變なことぢや。氣をつけねばなりませんぞ。とにかく御一しよに參ることにしよう。』

と、お坊さんは商人たちと一しよに野原の道を急いで歩きました。野原はどこまでもどこまでも續いてゐました。

そのうちに日が暮れかゝりました。こんな野原で暗くなつたら大變だと、一そう急いでゐますと、やがて谷川があつて、谷川の端に大きな家が一軒見えて來ました。

お坊さんたちはそこに泊めて貰ふことにしました。家には髭だらけの親爺と若い男が四五人ゐました。親爺はみんなの前に出て、

『お勞れでしたらう。暫くお休みなさい、そのうちに御

飯を差し上げますから。』

と云つて、枕を七つ出してくれました。六人の商人たちは直に枕をして横になりました。そしてやがてするこ、ぐう〳〵鼾をかき始めました。

しかしお坊さんだけは家の樣子が氣になつて、どうしても眠る氣になれませんでした。でも自分だけ起きてゐて、變に思はれるこいけないと思つて、横になつて眠つたふりをしながら、こきゞ〳〵眼を開けて、そつこ家の中の樣子を窺つてゐました。

臺所では爐の上にお釜とお鍋が掛けてありました。そして爐の前に大きな臺があつて、臺の上に盥の樣なものがのせてあつて、その中に土が一杯はいつてゐました。お坊さんは心の中で、

『はてな、お釜は飯で、お鍋は汁だらうが、あの土は何にするたらう』

こ思つてゐました。暫くするこ、親爺が袋の中から何かの種子のやうなものを掴み出して、土の上にふりまきました。こ若い男がすぐに菰をもつて來て、土の上にかぶせました。そして皆なで何やら呪文のやうなものを唱へて菰をこりのけますこ、土の上一面に青い草が生えてゐました。若い男はその草をつまんで小さくきざんで、お鍋の中に入れました。お坊さんびつくりしました。

やがて親爺が出て來て、

『御飯が出來ました。さあおあがりなさい。』

こ云つて、お釜から御飯をついで、お鍋からお汁をついでみんなの前に並べました。商人たちはおいしいお汁だこいつて、青い草の入つてゐるお汁をがぶ〳〵吸ひました。しかしお坊さんだけは、食べるふりをして、青い草をみんな懷の中におこしてしまひした。

御飯がすむと、また親爺が出て來て、

『さあお風呂にお入りなさい。湯殿が廣う御座いますから、御一しよにお入りなさい。』

こ云ひました。商人たちはよろこんでぞや〳〵と湯殿の方に行きました。お坊さんだけは一旦湯殿にはいつてから、そつこぬけ出〳〵て便所にかくれてゐました。

みんながお風呂に入るこ、親爺が外から忍びよつて、湯

殿の戸を締めたかと思ふと、いきなりその戸を釘づけにしてしまひました。

お坊さんはいよ〳〵驚いて、

『ぐづ〳〵してゐると命が危い。』

と、便所の中から飛び出して、庭の後の垣根の蔭に隱れて、そつと覗いてゐました。

やがて親爺が、

『うまくいつた。早く持つて來い。』

と、大きな聲で言ひました。すると若い男たちが、手綱と轡とを持つて現れました。一人の若い男が釘を拔いて、戸を少し開けますと、いきなり馬が一匹湯殿の中からとび出しました。他の若い男がそれを捕へて、轡をはめて手綱をつけて、厩の方へ引いて行きました。また少し戸をあけました。と、また馬が一匹飛び出しました。少しづつ戸をあけるたびに、馬が一匹づつとび出して來ました。六匹だけとび出すと、親爺が、

『さあもう一匹だ』

と云ひました。若い男がすつかり戸を開けてしまひました、しかし馬はとび出しませんでした。みんなは驚いて、湯殿の中をのぞきましたが、空虛になつてゐました。みんなは大騷ぎをして、

『大變だ。逃げられたぞ。大方あの坊主だらう。早く追つかけろ。』

と叫びました。お坊さんは、見つかつては大變だと思つて、夢中になつて逃げ出しました。そしてやつと助かりました。

あとで聞くと、あの家は鬼の住家で、人間に青い草を食はせて、馬にして町へ引つぱつていつては賣るのだといふことでした。そしてあそこに泊つたもので、無事で歸つて來たものは一人もないといふことでした。

お坊さんはこれをきいて、身慄をしてこわがりました。

雲

大きな白いかたまり雲が
銅像の頭で
ツツと動いてはまたとまる。

BATA NO SHISHI

Kawazoe Kaichirô

1

Kore wa Itarii no ohanashi desu.

Antonio Canova to iu kodomo wa,mada chiisai jibun otôsan-ga nakunarimashita node, ojisan no uchi ni hikitorare, mainichi ishikiri no shigoto wo tezutatte orimashita.

Antonio wa kanshin nimo yoku ojisan ni tsukaete, otomodachi ga omoshiroku asonde iru toki nimo, jibun wa ishikuzu no naka ni tsuchi wo konete, iroironi saiku wo shitewa yorokonde imashita.

Tokoroga, asobi hanbun ni tsukuriageta sono saiku ga, tuihen umakatta node, ojisan wa 'Kono ko wa kitto shôrai rippana chôkokuka ni nareru' to itte, hitori yorokobi tanoshinde imashita.

2

Antonio no ojisan no sunde iru machi ni, hitori no kanemochi ga imashita. Aruhi kono kanemochi no hito ga, otomodachi ya shiriai no hito wo yonde ôjikake no enkai wo hiraku to iu node, Antonio no ojisan wa sonohi ryôrinin to shite sono uchi ni yatoware, Antonio mo mata oji to issho ni tezutai ni mairimashita.

Junbi mo hobo owatte, korekara shokudô ga hirakareru to iu jibun, fuini shokudô de mono no kowareru oto ga shita ka to omou to, hitori no yatoinin ga dairiseki no kakera wo motte kaketsukete kimashita. Miru to, sono otoko no kao ws massao de, samo komatta to iu yôsu desbita.

"Sâ, doshitara ii daro? Washi wa shokutaku no mannaka

ui oku hazu no suemono wo kowashite shimatta. Kore ga nakereba, shokudo no kazari wa dekinai,"

Kore wo kiita yatoin n ichido wa komarimashita. "Hontoni doshitara ii daro?" to, ryoribeya dewa 5.6 nin no hito ga atama wo narabete iroiroto sodan wo hajimemashita.

Tokoro e koso koso to yatte kita no ga rihatsuna Antonio desu.

"Ojisan dodesho. Watashi ni sore wo tsukurasete kudasaimasenka? Kitto rippana mono wo kosaete mimasu kara"

Minna wa fukidashite waraimashita. "Kono chippogena kodomo ni nani ga dekiru mono ka...." to iu yosu ga, meimei no Kaoni arawarete imashita, to itte, kono baai nantomo shikata ga arimasen node, toto kodomo ni subete wo makaseru to iu koto ni narimashita.

3

Chodo têburu no ue niwa, ima mise kara toriyoseta bakari no okina bata no katamari ga notte imashita.

Kore ni me wo tsuketa Antonio wa, katate ni naifu wo mochi, sore wo kiritotte sassoku saiku wo hajimemashita. Soshite, sûfun kan no uchi ni, migotona uzukumatta shishi ga dekiagarimashita.

Kore wo mita yatoinintachi no odoroki wa hitotori dewa arimasen; kuchiguchi ni hometateta ageku, yatoinin no hitori wa ôyorokobi de, bata no shishi wo teburu no ue ni kazarimashita.

4

Yagate shokudo wa buji ni hirakaremashita. Shujin wo hajime, utsukushii minari wo shita okyaku ga ozei haitte kimashia. Soshitie, bata no shishi wo mite, kuchiguchi ni homeagemashota.

Shujin wa yatoinin no kashira kara sono wake wo kiite taihen sono udemae ni odoroki, muri ni kodomot wo shokudo ni yobiire,

"Omae wa jitsuni rippana mono wo tsukutte kureta. Ittai

omae no namae wa nan to iu? Mata, omae no sensei no namae wa nan to iu no ja?"

Karadajû ase ni nurete, tada kashikomatte ita Antonio wa osoruosoru,

"Watakushi wa Antonio Canova to msohimasu. Sensei wa ishikiri no ojisan; kono hoka niwa dare mo sensei wa orimasen."

Sonohi no okyaku no naka niwa, Itarii de nadakai bijutsukao, chokokuka mo majitte imashita. Ichido wa kono kodomo no udemae wo homeage, Antonio to isshoni suwaru no wo eiyo to shite, ichido kono chiisana bijutsuka no tame ni shukuhai wo agemashita.

5

Akuruhi, kanemochi wa Antonio wo jibun no ie ni hikitori, Itarii de daiichiryû no chokokuka ni tanonde sono kyoshi to shi, mainichi kimama ni chokoku dake wo narawasemashita.

Umaretsuki kashikoi Antonio wa, rippana sensei ni tsuite sono waza wa mekimeki to agari, nochi niwa Itarii de nadakai chokokuka no hitori to natta to iu koto de su.

(Oshimai)

飴　屋

カンチキチキ　カンチキチキ
真夏の真昼を飴屋が
カンチキチキ
黒い顔に黒い手が
カンチキチキ
ぶちも坊やも蕃茄を
カンチキチキ
飴はとろけたろ
カンチキチキ
だれも通らぬ長い街
カンチキチキ　カンチキチキ

おもちや箱

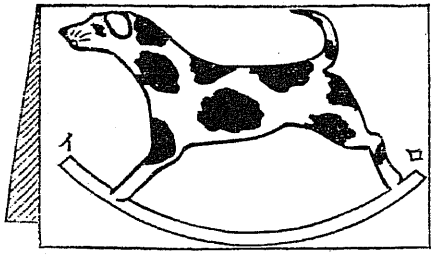
——家庭製作——

東京女子高等師範學校講師　藤　五代策

一　活動する犬

反物包紙を二つに折りて、其の一面に第一圖の犬の形を描いて（脚端には（イ）（ロ）の如き孤線狀をかきます）之を切り貫きます。裏面の方にも表面と同一の犬の形をかくのです。

第一圖



かうして切り貫いた二枚の犬は頭の部、脊の部、尾の部は糊で貼り合はせ、下部の弧狀部は兩端を貼りつけ、中間部は左右に開いて机上などに立てるのです今（ロ）端を一寸つけば犬は前後に動搖して暫時間は活動いたします。

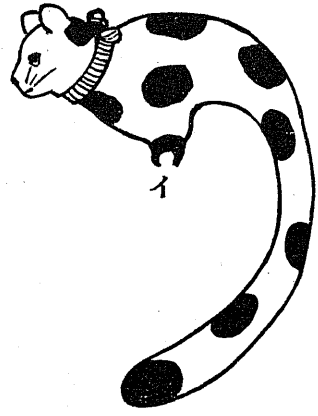
同一の方法によりて、馬、牛、兎、ライオン、など好みの獸を作りて動物園を作つてごらんなさい。

二　踊る猫

極めて厚いボール紙の上に第二圖の猫の形を描きます、（猫の頭と尾端とは成るべく前方に突き出し（イ）の前脚は彎曲内にありて此の猫の重心に當るやうに工夫せねばなりません。

次に此の猫を切り貫いて（イ）の前脚を丸箸の上にかけて尾端を一寸つきますと前後に振れて暫くの間は踊るので

第二圖



す。

同一の方法で鸚鵡、孔雀、栗鼠、猿などを作ることが出來ます。

三　動く鷄

原いボール紙の上に第三圖の鷄の繪をかいて切り貫きます（表裏面には綺麗に彩色します）次に稍太い針金一尺四五寸をとりて、之を螺旋狀に曲げ其の上端を鷄の腹部に確と取り付けるのです。

今此の鷄を机上に立てゝ胴を下に押へて放てば鷄は上下に活動して甚だ面白いのです。

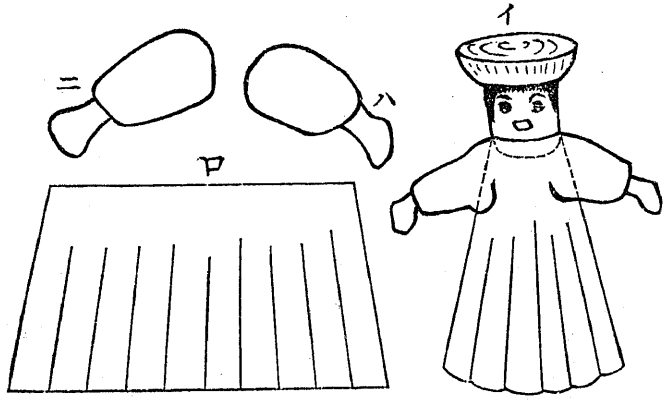
かうして牡鷄が出來たら牝鷄や雛などを澤山作つて養鷄場を拵へてご覽なさい。

第三圖

四　踊る子供

インク瓶の栓は上が太きくて帽子に似て居ります。下は小さいから子供の顔に似せることが出來ます。

第四圖



又古端書から(ロ)圖の如き形をこり縦に多數の切り目を入れます。

(ハ)と(ニ)は子供の左右の手を切り貫いたものです。今(イ)のインク瓶の栓の下端に(ロ)の紙を圓く貼り廻はし左右の肩の部には(ハ)(ニ)の手を貼りつけ、最後に栓の下部に白紙を貼りて、子供の顔を描くのです。

是れより左の手に盆を水平に支へ、其の上に今作つた子供を立てゝ、右手にて左の手頸を輕くトン〳〵こたゝけば子供は盆の面を面白おかしく踊り廻はるのです。

同一の作方によりて二三人の子供を作つて盆上に踊らしますこ離れたり近ついたり或は仆れるものもあつて甚だ滑稽でございます。

神は人間を創造した、そして生存を肯定してゐる。病氣は人間が神に對して犯せる罪の制裁である。醫師は人間が神に對して犯せる罪の辯護人である。辯護人の多きを必要とする世界は滅亡の淵に歩みつゝあるものである。

萬國幼稚園協會案

幼稚園要目（續き）

第八章　音　樂

子供達は子守歌や睡り歌を聞いて其の旋律やリズムを反應するが、言葉や音樂の性質上、一定の形式を敎へられない前に自然に歌ふことをはじめる。小さい子が仕事や遊びに夢中になつてゐる時には自分で小聲に歌てゐる。キープリンは Muhammd Din の物語や Plain tales from the Hills に於て、小さい黑ん坊の子供が石やガラスの破片や萎れた花で造た不思議な宮殿の事を物語て居る。或日 Muhammiet Din が打たれて凹凸になつてゐるボールを見附けて其れが他の物より一層不思議な組立てが出來さうであつたので、「急に愉快な唄をうたひ出した」

一般目的

歌はふといふ望みを起させること。

樂器、肉聲共に、音樂といふものに對する感じを呼びさますこと。

音樂的經驗から社會的感じを創造すること。

主題を一層活々と興味あるものとする事。

特質目的

輕快な調子と言葉の流暢な歌ひ方を定めること。

子供のリズムに對する感覺を發展せしむる事。

子供をして他の施律を再現し、元の旋律を考へて表す樣に導くこと。

主題

要目の主題は歌の種類を次の如くに提示する。

歌の種類

1　家族的の歌

2　挨拶の歌
3　讃　歌
4　式　歌
5　天候の歌
6　愛國の歌
7　仕事の歌
8　季節の歌

一般目的に關する方法

歌はふしする望を起させる事。

いづれの群團的練習に於ても、教師が正しい感じを導くならば子供達は熱心にこれに參加する。單音を取扱ふ時に子供に自分の無力を感じさせない樣にしなければならない。單音は歌ふといふ事だけで學び得る。

群團で歌ふ時の熱心さが子供達をあまり大聲で歌ふ樣にする傾向がある。これらは子供達の聲の爲によくないから注意しなければならない。他兒の聲を壓倒しようとする一人々々の子供達は、歌ひながら他兒の聲やピアノの音をきく樣に教へられるべきである。

或幼稚園で採用されてゐる樣な大層調子のめちや〳〵な成て居ないのと、唱歌の間でさへも始終子供達が靜かに壓さへつけられてゐる他の幼稚園又は小學校の教室に於ける一本調子な歌ひ方との間に於て良き中間を求むべきである。

器樂と聲樂とを通じて音樂的感じを呼び起すこと。——歌をきくこと。

子供達はお話を聞く事に依て文學上の感賞力を增進し良き繪を見る事に依て美術の感賞力を增進する樣に歌をうたふのを聞く事に依て音樂の感賞力を增進し得る。蓄音機は肉聲には代れない、何處の幼稚園の教師も子供達に對してお話をして聞かせる時に歌を歌つて聞かせる事も出來る筈である。歌の選擇は一年の一定の時期には群の興味を根とする。嬰兒に對する母親の注意といふ事は民謠やブラームスの子守うたを歌ふ樣にする。子供達に教へ樂と思ふ美しい精巧な多くの歌は歌て聞かせるのがよい、之等の歌は Neidlinger book の中の歌の樣に空想に富んで居るので宜し

更に美的な歌の例を擧げれば

Songs of the child world の中の The bird's Nest。

Nature songs for children の中の It is spring。

若し教師が歌て聞かせる事が出來ない時にはレコードを使ふのがよい――子供達にとつて聲樂のレコードを聞くといふ事は器樂のレコードを聞くと同樣の價質があるかどうかは疑しい事ではあるが――。丁度お話を聞く時の樣に子供達は歌ひ手の顏を見る事が必要である。

器樂を聞くこと。

我々は幼稚園でピアノを用つて屢々失敗した。我々は幼稚園に於て餘りたえずピアノを使用したので、どんな賢い方法に依てども子供達がそれを聞く能力を鈍らした程である。例へば毎日の會集の終りの時にするおきまりの「靜さ」の如き。

大人行進の樣な活動に Handa の Largo の樣な偉大な緩奏曲を使用せるのは亦樂器の濫用である、が其れとは反對に行進の急奏曲を奏したり其他劣等劇場の音樂などを使用するのもこれと同樣である。我々は音樂の原形をくずして、幼稚園に都合の宜い樣に、其音樂本來の目的をはずれて使用を試みてはならぬ。Largo の如き音樂の高尙な調子を破壞し之を不具にして幼稚園の種々な活動のリズムとする樣な事があつてはならぬ。一方劣等劇場の音樂は演奏の技倆如何に係らず所詮俗なものといふにすぎないから、斯樣な空氣をして幼稚園を侵さしめるべきでない。

Schumann の Wild rider and Soldi:r's marcha や Schubert の Marchemilitaire や Gounod の Funeral marche of a maruonetta は幼稚園で用ふるに適した簡單なそして模範的な音樂の例である。幼稚園に於ける凡ての樂器の性質は活動に表して子供達が反應しつゝあるにしても、無意識的な効果を有し、其選擇が賢ければ音樂觀賞力の助となる。音樂の或特殊な形は往々にして要目の考と一致する。かのクリスマスに演奏され歌はれる Stille nacht の如き又リシントン誕生祭に演奏される他民族の愛國の曲の如き又春演奏されるメンデルソーンの Spring Song グリーグの To pring の如き。

學年の終りに子供達は器樂と歌とを簡單な方法で次の樣に分類する。

眠り歌。ダンスの音樂。お寺の或はオルガンの音樂。軍隊音樂。

かゝる特色を持つ新しい音樂を子供に聞かせると子供達はそれがどの部に屬すかを語る事が出來る。

社會的感情を創造する事。

合唱に於ての社會的要素は音樂の主要價質の一である。近來團體合唱が國内到る處發達したのは此の要素が根據に成てゐるのである。幼稚園の教師が子供と一處に歌ひ一處に奏する理由は、團體が共通の經驗に與かるからである、が然し多くの音樂監督は、教師は決して子供と一處に歌てはいけないと云ふ、かような命令の理由は、子供が教師の聲にあまりたより過ぎ又教師の聲が子供の聲を壓倒すると云ふのにある。且つ又若し教師がたえず子供と歌はふとすると子供の一人々々の聲をきく事が出來ず從て子供各自の旋律を正しく歌ひ得る能力の程度を知る事が出來ない。教師は子供の聲に耳を傾くべしとする場合其處に若干の教訓が存する事は眞實である。と同時に、我々は技術が進歩しつゝある時と、挨拶の歌又は愛國の歌に於けるが如く社會的經驗を表白するに音樂が用ひられつゝある時とを區別すべきである。斯くして教師は群と同一視される。

主題をもつと明かに興味深くする事。

主題の或狀態は音に依て最もよく表現される、繪畫は子供に對し直接明確に訴へるが然し感情的と云ふより寧ろ智的である方が多い、敬虔の感じを起さうとするには Still Nacht を彈いて、或は歌て聞かせれば、クリスマスの繪を子供達に見せるのに適當な氣分を作る事が出來る。

或觀念は他のどの方法よりも巧みに音に依て表現される、お寺の鐘や鍛冶屋の槌の音の如き、斯る音樂の特性は音樂感賞に大に密接なる關係がある。

特殊目的に關する方法

快活な樂しい音調を定める事。

1　よい音調を作る樣にする事。それが爲に子供達が、普通音階のFより低くより高く歌はないようにする。團體合唱の時、子供達が大きな聲を出さないようにする、子供が自分の聲がどんなかゞ解るように一人々々で歌ふ事を

奬勵する。模範として教師の聲を聞き、正しく調子の合た兒童の歌を聞く。

2　歌の文句を流暢につなげて歌う樣にすること。息をつぐ事は調子の上に重要な事である、そして滑らかに歌ふ習慣が、正確な音調と同樣に最初から初められねばならぬ Jockt gill や Here's a Ball for Baby の如き自然にリズミックなものは滑らかな歌がうたへる迄は敎へてはならない。我々は短い歌を敎へ、子供に敎へ子供に敎師のを模倣させて一息で Our Goodmorning We will say の樣な可成長い句を歌う樣に奬勵する子供達は人が全文を滑らかに、きれ〴〵で無く、話す樣に、句を云ふ事に依て此の目的を達す樣に導くことが出來る。初めは凡ての歌は極めて靜かに歌はるべきである。我々は子供達に對して言語、リズム、旋律の熟達をあまり急に望みすぎる。入學の初めの數週間にこれがなされると或る子供達は皆が歌てしまつたあとでなほ、歌をのろ〳〵と歌ふ。Mother Goose の詩や Finger Plays は學年の初めには歌はずに話して聞かせる方がよい、若し話が柔かな音聲で豐富な表情で語らるゝならば歌ふと同樣に子供達には興味あるものである Mother Goose の詩を劇化させのに器樂を伴ふもよい。子供達が活潑なゲームをしてゐる間は歌てはいけない。通常、活動は子供に歌ふのを忘れさせるほど夢中にならせる。子供達が靜かに歩きまわる The farmerfin the Dell や Itisikit Itasket の樣なゲームでは活動が歌をうたふ息の調子の妨害とならぬ、しかし此の際子供の會合の時や通りでゲームをして遊ぶ時の樣な貧弱な音調に退化して行かない樣に注意しなければならない。リズムに依る子供の感覺を增すこと。——

1　器樂に對する身體のリズム的な反應——　マーチ、スキップ、ラニング等の如き——。

音樂は子供の活動に從ふ。

子供は音樂のリズムに反應する。

新しい音樂に對して子供は、之はスキップが出來る走れる等といふ事を認識し正しい活動を以て之に反應する。

子供は音樂の特性に對して適當な方法で反應する。例へば Ladita に於ては、最初の數節の緩やかな調子に次いで大層活潑なリズムが來る、この曲の初めの部分で子供達は自

分から歩いたり、ごん〳〵踏み歩いたり（園の周圍を、又中心に向ひ或は圓週に向て）し、次の部分では踊り跳ねたり、くる〳〵廻たりする。

2　器具や手等でタイムをとる事。

歌のリズムを手拍子でとる事。

四拍子とか三拍子等の異た速度を手拍子する事。

手拍子と同樣に指揮棒でタイムを取ること。

トライアングル、大太鼓、手太鼓等の一隊で一緒にタイムを取ること。

樂器の全部は指揮者從ふこと。

Ladita の曲に應ずる場合の樣に音樂の特性に對して樂器の輕重を區別すること――重い時には大小の太鼓を打ち、輕い時にはトライアングルを打つか、小太鼓を振るかする樣な――。

子供達が其の旋律を述べたり考へたり又他の施律を再現する樣に導くこと。

1　聲の吟味。

學習の最初の數週間に子供達の聲を吟味し、子供達の音調を適當させる能力に從て三つの群に分類すべきである。1、園は單曲を正しく歌ふ事の出來る子供達で組織され。2、園は曲の部分は歌へても高い處の出ない子供達で成立ち。3、園は單音丈しか出せない子供で組織でされる。

2　調子をそろへる事。

曲を歌ふ事の出來ない子供は殆ど多くの場合、身體上の缺陷ではなく曲を作る異た音調を聞き別ける能力が無いのである。歌を正しく歌ふには子供達は單に音の種々な高さを、聞いたり出したりするばかりでなく又リズムや言葉に通じ音調と言葉とが調和するようになければならぬ。

簡單な歌を手はじめとして、それから後に述べる樣に分析に進むのが最も良いのであるが、僅の調子しか出ない子供達に對しては音調の練習が必要である。これは小園で行ふ方がよい、但し時としてほ幼稚園の全兒に對しても興味ある練習である。

歌ひ得る子供の、音調の正確な再現は他の子供が音調を一層明瞭に聞く助けとなる。それは小さい子供の聲といふ同一の媒介から聲が出る故に――。

ピアノや教師の聲も亦模範として用ひてよい、ピアノの音は際立てはつきりしてゐるが教師の聲がその質に於て、子供の出さうとする調子に近いものである。勿論問題が、調子や言葉に結合するのにある時には肉聲が、よりよい模範である。

歌と話とには音調を出す上に多くの暗示がある。

たとへば、次の如き。——

赤ん坊の喇叭が「トウト、トウト、トツト、トー」

此小豚は「ウイー、ウイー、ウイー(音い調子)」と叫ぶ。

三匹の熊は「誰か私のスープを呑んだ」(三音度)と云。

家族の歌は「これはお母さん、これはお父さん」等と音階でいふ。

子供達が曲をはつきりと聞きされる樣に、ピアノの周圍に小團が集て歌ふのはよい事である。

3 單音

多くの個人的練習は單音ですべきである——若し出來るなら他の子供達の居ない室で「赤ん坊の喇叭の」トウー、トウー、の樣に、初は子供をして自分自身の調音を作らしむべきである。それから教師に模倣させる——子供は小さなラッパを強く吹く事が出來るかどうかを考へて——。輕い小さい音調は子供達には通常高い調子と思はれてゐる。

子供を勵まして、模倣に依り一層高い調子を出させる樣にし、或一つの音の高さから變した時には如何に之が微細であつても褒めてやる樣にするがよい。音譜の度の隔りの多い調子を歌ふ事の出來ない子供が、蒸汽ポンプの號笛をきいて其の眞似をした爲に音を上るようにする事を偶然に助けられる事がある。單音を歌ふ子供達が旋律をうたふ子供達より大きな聲で歌はないように教師はよく注意しなければならない。斯樣な子供達に對しては、他の友と一處にうたふ間よく旋律に耳を傾ける樣に助けなければならぬ。

4 歌

學期はじめ二三週間は、ごく僅しか歌は教へてはならぬ、そして其等はごく簡單なものであるべきだ。それ丈で完結してゐる、歌の一くぎりを用ひてもよい、Good-bye to you Good-bye Good-bye (Child Landin song and Phythm の中の)

の如き。

吾々は幼稚園に於て、園唱に力を注ぐ習慣がある、それは練習の社會的性質と、歌の主題が集團に興味があるとの二つの理で。

吾々は此の種の唱歌を學年の始めに課するため悪い習慣がつくのを餘りに氣付かずに居すぎた。我々が集團の中にあつて個々の聲を聞き分ける事に慣れると、或子供達が僅かな音調しか歌へない――他の音調を聞かない爲に――ことを發見し得る。彼等が一人で歌ふ時には元氣なく低い聲である。たえず斯樣にしてピアノ又は教師の聲に逆てうたふと子供達は音の印象が不明になつて來る、そこで始めはごく小さい園唱が必要になる。吾々はこれまで學年の初めに於て十分な一人〳〵の歌ひ方をしなかつた。若し幼稚園に正しい雰圍氣があり、歌はふとする場合いつでもうたへると感ずる樣になつてゐたら、多くの場合自己意識が強くならない方がよい。一人〳〵でうたふ事から自發的な小さな旋律が生ずるのである。吾々は畫く事を教へはじめるのに子供の再現を豫想して、自分達の完全な手本を提示しはしない。吾々は子供達が自由に想像力を働かして製作し漸次意識的な結果へ近づく樣にと奬勵するのである。なぜこの方法を歌ふことにも用ひないのかGood morning to you の答に I am here といふ樣な句を子供達自身の調子でうたはして見よ。春の歌秋の歌をうたふようにとらはれて、その瞬間にそれらの歌を即座に作て歌た子がある、又他の子供達は記憶してゐた歌をうたつてゐた。創作された歌に常に朗吟調の形式である。或日子供達が爲てゐる仕事と同種の物の歌をうたつて居る時に、一人の男兒が調子を外して Mulberry Bash といふ事を音樂的に云つた、といふのは名が云ひ難いのでリズムから考へ出したのである。子供が自分自身の簡單な曲を聞く事を覺えるのが他人の音樂を聞く基礎になる。此の寧ろ「偶然」な歌ひ方は次の樣な句を小さい曲にする能力を發展させるべきである。

Hush my baby, Dum, Dum, Dum, Up,up in the Sky Go to aleep. Here my little drum. The little birds fly. 勿論教師は最初、曲を心に留めながら、ピアノ或は聲で聞かせて子供達を助けなければならない。之等の Mr. Cady の爲た事を

よく知つてゐる人々は、此の小さい子供達と一處にする創造的な仕事が、ある價質ある結果に到達するといふ事を知てゐる。2團3團に於ては、吾々は一層、歌を敎へるに先て先づ一人〳〵で歌うといふ事が大切である、全團で歌をうたふ事は、ごく簡單なもの丶外は少なくしなければならない。旋律をうたふ事の出來る小さい團は屢々他の子供達に歌て聞かせるがよい。敎師は Good morning, Dear Childer (Fill song book の中にある) の如きむづかしい句をぬき出して模倣に依て繰り返させねばならぬ。勿論歌は常に場合に應じて全體を子供達にうたつてきかすべきである。練習が最初に來るといふ事は決してない。

効　果

態度。興味。趣味。

自分で或は他と共に、音樂を聞き又歌ふといふ事の興味。

入營前に一般の子供が聞かされたものよりも高級な音樂の新しい興味。

習慣と技巧。

明瞭な、輕い調子を出す事。文句を繋げてうたふ事。正しい云ひ表し方から生じた自由な呼吸の續ぎ方。子供が自分であまり低くはじめた調子の度を變へる能力。

知識。

特質に應じて新しいリズムの反應する能力。曲の精神の特色を區別する能力。

二三の簡單な歌を一人でうたひ得る能力。(終)

知つてゐるだけ言ひ表せないのは言葉の缺陷である。言葉の不足を表情に補ひきれぬのは、又表情表現を感受し得ないのは感情敎育の疎雜な爲である。日本人ほど言葉以外に表情でもの言ふことを憶怯がる人種はない。子供の時分にはそうでもないけれど。(エム生)

お春

東京女子高等師範學校教授　岡田美津

五　お春の味方

小山の上の學校では、お春にとつて得意の場面もあり、又心遣ひな折もあつたが、兎に角お春は、學校や友達を面白く思ひ、それに氣を取られてゐたから、仕合せであつた。さもなかつたら、河崎村での最初の一ト夏は、此兒には、辛いものであつたらうから。

お春は、おみね伯母さんを好きにならうと骨を折つたが、これはもう、大失敗に終つてしまつた。この兒は、缺點たらけな、極く人間ぽい兒で、「家庭の天使」にならうなぞと夢にも考へなかつたが、それでも、義務の念があつて、世間並の善良な少女でゐたいと思つてゐた。であるから、自分で定めた標準に達しない時は、いつも情ないと思つた。伯母さんの家に居て、食べさせてもらひ、着せてもらひ、學校へ遣つてもらつてゐながら、始終伯母さんを心から嫌ひなのが、いやであつた。お春は、この心持を、何かは知らず、濟まない劣卑な事だと考へた。そして、後悔の念が盛んに起こつた時は、氣むづかしい、怖い伯母さんの機嫌を取るやうに必死に努めた。併し、この兒は、殆ど伯母の傍に居た事がないのだから、折角のその志も通じる譯がなかつた。伯母の探るやうな眼、邪慳な聲、堅い節くれ立つた指、一の字に結んだ唇、長い無言、自分の髪と色の適はない入毛の前髪……何一つお春の心を惹くものが無かつた。

伯母の方でも、またお春を見るたびに、苛々したのは、いふまでもなかつた。この兒は、自分の室に行くのに近いのできつと表階段を登るし、柄杓を手桶の上に掛けるのを忘れて、臺所の棚の上に置いた。腰を掛ける時には、猫のための椅子に掛けるし、使に行くのは悅んで行くけれど、何を買ひに出たのだか忘れてしまつた。網戸を開け放しにして置いて、蠅を屋内に入れるし、一ト時だつて默つて居る折がなく、何かしながら歌を唱ふか、口笛を吹くかした。そして花を玩弄るのが好きで、花瓶に挿したり、着物にピンで止めたり、帽子に飾つたりした。つまり、この兒はその父親……あの取柄のない父親そつくりなのであつた。一體お春の父親の一家は他國のもので、この河崎の生れでは無かつた。おみねに言はせると、この村以外で多數、人が生れるのは自然で仕方がないが、他國ものに祿なものはないのであつた。

「だから、お花が來てくれたらよかつたに……お花は母親の一家の氣象を受けてゐるから。何か話しかけられなければ物を言はぬ內氣な兒で、お春のやうにいつも〳〵口を出したりしない。お花は編物が好きだし、十四の時に、もう敎會へ入つたりしたから、きつと模範少女になつたらうに……こんな黑髮の大目玉の女兒が此家に來るとは！」

お春にとつて、およね伯母さんの居てくれた事は、まづ地獄で佛の格であつた。この熱情的の少女が、この家に來たこの辛かつた頃に、靜な聲の、よく察してくれる眼付の、きつと肩を持つてくれる、およね伯母さんは實際有り難いものであつた。

お春は、針仕事を持出して、臺所で、およね伯母さんの傍に居た。おみね伯母さんは、居間の窓際で戶外の見える位地を占めて居た。時によると、家內中橫手の緣に出て縫物をすることもあつた。そこには、風車草や忍冬が、からみ付いてゐて日蔭が出來てゐた。お春は、手にしてゐる茶色の縞木綿の切を長くて〳〵限がないと思つた。それを縫ふことの骨の折れることつたら。絲が切れたり、指拔が「うつぎ」の茂みに落ちたり、針が指に刺さつたり、額から汗が流れたりした。それでゐて縞と縞が適はなかつたり、縫つたところが縮くれたりした。針を磨きへらす程磨いて、莓形の金剛砂の袋の中

へ無上に通すけれど、やつぱり軋んで仕方がなかつた。それでも、およね伯母さんが、根よく世話を燒いてくれるので、お春の指先も、幾分利くやうになつて來た。この兒の指は、鉛筆や、繪筆や、ペンをあんなに上手に使ふのに、もの縫ふ針にかけては誠に不器用なのであつた。

その茶色の着物が始めて縫ひ上つた時に、お春は丁度いゝ折だと思つて、おみね伯母さんに　この次のは異つた色のにしてもよいかと訊ねた。伯母は、語短かに、

「茶色のを一纏めに買つたのだよ。もう二枚分あれから取れる。かけがへの袖や、繼ぎや、足前の切も取れるから得だ。」

「それはさうだけれど。店の人が取換へてもいゝて言ひましたよ。同じ價で、桃色のと、藍色のとをやるつて。」

「お前尋いたのかい。」

「えゝ。」

「餘計な事を！」

「金子しまさんが前掛を買ふので柄を選んで上げてたんです。私の勝手な色にしても、伯母さんは何とも仰しやないかと思つたから。桃色でも、茶色位汚れが見えないんです。洗濯しても、色が褪めないつて店の人が言つてました。」

「フンあそこの店の人は、洗濯の大先生だからね！　子供は、派出々々しく飾り立てるのはよくない。だが、およね伯母さんは何と言ふかね。」

およねは答へた。

「一つは桃色にして、一つは藍色にしてやつてもいゝでせう。子供は同じ色のを縫ふと倦きるものだから、色を變へたがるのは無理ありませんよ。それに、年中同じ茶色で白前掛では、貧民學校の兒みたやうでせう。……でまた茶はこの

兒にちつとも似合はないんで。」

「見目より心」といふ事がある！ お春は容色で身を誤ることはない、その點は確だ。だから「見てくれ」がごうのかうのと御機嫌を取つてやることはない。もう今つからお洒落でしやうがないんだ……自慢する材料もないくせに。」

「年がいかないから、派出なものに心が惹かれるんですよ。私だつてこの位の年頃には覺えがある。」

「お前は、お春位の年頃には、隨分馬鹿だつたもの。」

「えゝ。私、それを有難いと思つてゐます。も少しあの馬鹿さを殘して置く工夫をすればよかつた思ふんです……年を取つた時の樂しみにね。」

やつとまあ桃色と話が定まて、その着物が仕立て上つた。

そしておよね伯母さんは、思ひもかけぬ事でお春が喜こばせてくれた。細い、白の麻テープを山型に折ることを敎へてくれて、それを衿や袖口にかゞりつけて緣飾りにしろといふのだつた。

「お回に丁度いゝ御細工仕事だよ。冬の夜長に、本ばかり讀んでゐると、おみね伯母さんの氣に入らないからね。さ、この白テープを二列にその桃色の着物の裾に假縫で綴ぢ付けて御らん。碁盤目通りにまつ直ぐによ。伯母さんが、山型の飾を袖と胸のところに附けて上げるから。すると、これは上から三番目のよい着物になるね。」

お春は嬉しくて堪らなかつた。

「私、とつとゝ假縫してしまふわ。裾のまはりを緣縫したから經驗があるけれど、一廻りの長い事百丈位あるわ。でも飾りを縫付けるのなら、此家から富田町まで位、長さがあつても構はない。あのね……おみね伯母さんが、私を幸兵衛小父さんと一所に富田町へやつて下さるでせうか。小父さんが、行かないかつて再、訊いたのよ。一度の土曜日は、苺を摘まなくちやならなかつたし、その次の土曜には、雨が降つたし。伯母さんは、私を行かせたくないのかもしれない。

……一寸伯母さん、もう四時二十九分よ（四時半からお春は遊べるのだつた）鳥飼きよさんが、先刻から、「すぐり」の木の下で私を待つてるわ。もう遊びにいつてもいゝでせう。」

「あ、いゝよ。納屋の裏からいそいで馳けておいで。おみね伯母さんに音が聞こえないやうに。オヤ、下山の鈴ちやんだの、双生兒だの、金子しまさんが塀のかげに隱れてゐるね。」

お春は緣を跳び下りて「すぐり」の下から鳥飼きよを引出し、それから複雜た合圖をして、金子しまだけを下山の一まきから離れさせ、さう〳〵下山兄妹をまいてしまつた。下山の子供達は、年が行かなくて、今これからしやうと企んでゐた遊びに邪魔なのだつた。が、この子供達の家の前庭は、村中で一番よい遊び場だつたから、無下にこの子供達を悔蔑し去るわけに行かなかつた。この家の前庭には、古橋、熊手、大樽、長椅子、寢臺などがさま〴〵の破損の程度で、雜然と置き並べてあり、しかも、それが二日と續けて同じ狀態でゐなかつた。下山のおかみさんは、殆ど宅に居ないし、よしや居にところで、前庭で誰が何をやつてゐやうと無關心でゐた。

子供達の好きな遊びは、この家を城に見立て、この城の中に立て籠もつてゐる小數の米軍を、敵兵が包圍攻擊する事であつた。誰もが米軍を勝たせなくてはならないと決定てゐるので、役割を定めるのに中々注意が要つた。下山シーソーは大抵いつも敵軍の司令長官だつた。が、實に、たよりない司令官で、その矛盾した號令と、後陣に控へてゐる、が好きなのとで、彼の下にゐるどんな隊でもに、大敗をさらせるのに妙を得てゐた。時には、この家が丸木小屋になつて、豪勇な移民が、攻め寄せる土人を擊退したり、土人に虐殺されたりした。ごの途、かういふ遊びのあとは下山の家は、手もつけられぬ亂脈さになるのだつた。

子供達にとつて下山のうちの次に好都合の活動の場所は、「秘密の地」といふところだつた。それは、おみねの所有の草地で、小高いところや、凹地やら、また青々として飯を事するのにいゝ平地のあるところだつた。丁度一叢の樹がいゝ工

合に蔭を作つてくれ、また他からは見えぬやうにしてくれてゐた。

今日は、こゝで、高い正方形の家を建てゝ、お春がその中に入ることになつてゐた。お春のシャロテ、コルデ（フランス大革命の時マラを暗殺して死刑になつた婦人）が獄屋の格子に倚りかゝつて居るのだつた。

お春は、金子しまの前掛を頭に巻き附けて、牢の中に居た。その氣持は何ともいへなかつた。格子に頭をもたらせてゐると、格子が冷たい鐵の棒になつた氣がして來た。そしてその眼も、近藤お春のでなく、シャロテ・ヨルデの悲痛の心を映し出してゐるやうに思はれた。

「うまく、出來たのね。」

と金子しまと鳥飼きよは、自分達二人でこの獄屋を作つたので、その手際を遠慮なく賞めるのだつた。

「これ破壞したくないのね。隨分骨が折れたのですもの。」とおきよがいつた。

「石をすこし動かして、上に二段だけ除れば私、跨いて出るから」とシャロテ・コルデが案を出した。「そして、あとをその儘にして置けば、明日あなた達が、牢へ入つて「塔の二皇子」になれるわ。私殺して上げるから。」

「皇子つて？　塔つて何？　その話をして頂戴」とおきよも、おしまも、せわしく尋ねた。

「今はいけない。御夕飯ですもの。」お春は、これで中々、嚴重な、規律家だつた。

「あなたに殺されるのは本望よ。」と金子しまは、どこまでも忠實に答へた。「たゞあなた殺す時本氣になるけれど。……下山の双生兒を皇子にしてもいゝのね。」

「殺される時に、大聲を出したりしていけないわ」とおきよが反對した。「あの連中は遊ぶ時に、ほんとに下らないんだもの。それに、この場所を敎へると、始終こゝへやつて來るは。そしてあそこの家の御父さんみたやうに、何か盜るかもしれない。」

お春は答へた。

「親がものを盗んだつて、あの子達が盗むときまりやしない。あなたね、私の親友でゐたけりや、それな事をあの子達の前で言つちやいけないのよ。私の母さんがね、その人の前でその家の人達の悪口を決して言つてはいけないつて仰しやつたわ。それや、辛いものだつて。その人の咎でもないのに、恥をかゝせるのはごく悪い事よ。」

六　桃　色

ある金曜日に、山の上の學校に、學藝會があつた。金曜日の午後は大抵、對話、唱歌、暗誦などをする日と定まつてゐたが、兒童が心から樂しみ悅ぶ日ではなかつた。兒童達は、詩の暗誦をするのを厭がつた。それを覺える勞をいとひ、中途で支へるのを氣遣ひ恐れてゐた。寺岡先生は、その日歸宅する頃には、頭痛がして、歸へつてから、時によると、夜まで床に就いてゐた。參觀に來た女親などは、子供がおきまりに、支へたり、口訖つたりするのを、額に冷汗を流し〳〵正面の席で聽いてゐるのだつた。どうかすると、絕句してしまつた幼兒が、ワッと泣き出して、母親の膝に抱き付くと、母親が戸外へ連れていつて、賺かすか叱るかした。兎に角、一人がやり損ふと、一層怖氣がついて一同の元氣が減るのだつた。

ところがお春が來てから、この會に新な氣分が出來た。お春の御かげで下山の双生兒がこんどの會に三節ほどの詩を、可笑味をつけて暗誦し了せるやうになり、當人達も、寺岡先生も、他のものも、みな大悅びをした。それから、舌たらずの鈴ちやんは、舌だらずの兒が何かいふやうに出來てゐる詩をすることにお春が定めてやり、お春自身と金子しまは、對話をするといふ事にした。お春と一所にするといふ嬉しさが、おしまの元氣を唆つて、彼女にも自信が出來た。寺岡先生は、こんどの學藝會は、非常に面白いから、村のお醫者の奥さんと、牧師樣の奥さんと、學務掛を二人と、兒童の母親を四五

人招待した、とその朝、全校に知らせた。それで、準備として、金子精一とお春とで、二つある黒板を一つ〳〵裝飾するやうにと言付けた。精一は、學校一の畫家だつたので、黒板に北アメリカの地圖をかいた。お春は、もすこし寫眞的でないものを畫きたいと思つて、見されてゐる全校生徒の眼の前で、手早く、米國の國旗を畫き上げた。……赤と白と青のチョークで、星も條もそれ〳〵誤りなく畫いた。そして、クンーションの入れてある卷烟草の函の蓋から模寫して、國旗の側にコロンブスの姿を畫いた。

寺岡先生は、感心してしまつて、

「皆さん、春さんがこんな立派な畫をかいたのですから、拍手しやうぢやありませんか。この畫は、學校の誇りです！」

一同は、意氣込んで拍手した。そして賀田林三は、手を振つて、盛に萬歳を唱へた。

お春は、嬉しさに胸が躍つて、涙が眼に出て來て、極まりが悪くなつてしまつた。自分の席に戻る途さへよく見えなかつた。可愛想にこの兒の淋しい、つまらぬ生活で、今のこの感激すべき刹那のやうに、人から推されて、賞められ、報いられた事はなかつたのである。義俠な行ひが義俠な行を誘ひ出すやうに、熱心は熱心を生み、機智才略は、また、機智才略を呼んだ。鳥飼きよは、全校が國旗の歌を唱つて折返のところで、お春の畫を指さす事にしやうとの案を出した。賀田林三は、精一とお春とに、それ〳〵自分の畫に署名させて、來賓に誰が畫いたが分るやうにしやうと言つた。目黒ひさは、壁の大孔を青葉で埋めて、水桶に、野の花を一杯活けたいが宜しいかと尋ねた。お春の心は、そんな實際の細かい事柄を離れて、たゞ恍惚として默つて居た。心が感激に充ち〳〵て、對話の文句も忘れさうになつてゐた。

休み時間に、お春は心中大得意なのだつたが、謹慎やかに振舞つた。そして皆が打解けた氣分で居た爲、かねてお春と仲の悪かつた住野みんまでが、お春の指圖の下に、青葉の枝を集めて、汚いストーブを被ひ飾つたりした。

寺岡先生は、十一時四十五分に課業を止めて、家の近いものは、着物を着換へて來られるやうにした。お春とおしまは

只、もう氣が立つてゐるので、踏段の處で息をついたゞけ、あとは、ひた走りに走つて家に歸つた。

「あなたのこの伯母さんは、あなたに、一番よい着物を被せて下さるでせうか。それこも、黄色のキャラコのあれでせうか。」とおしまが尋ねた。

「およね伯母さんに尋いて見るわ。」こお春が答へた「おの桃色のが出來上つてゐるといゝんだけれど！　私が今朝、お家を出る時、拍母さんが、ボタン孔をかゞつてゐたのよ。」

「私はね、母さんに柘榴石の指輪を貸してもらふつもり。國旗を指さす時に日があたつてキラッと光ると、きれいだわね。……さよなら。學校へ歸る時に、私を待たないで頂戴。私乘つてくかも知れないから。」

お春は歸つて見ると、横手の戸に締りがしてあつた。が、鍵は、段々の下に入つてゐるこきまつてゐた。河崎村ではみんな、そうするのだつた。お春は、戸を明けて、茶の間へ行つて見るこ、食卓の上に御飯の支度がしてあつて、およね伯母の置手紙に、伯母達は、鳥飼の御かみさんと宮本村へ出掛けたこ書いてあつた。

お春は、バタのついたパンを一片頰張つて、表階段を、自分の室へといつた。寢臺の上に、およね伯母さんが、優しくも仕上げて置いてくれた桃色ギンガムの着物が載つてゐた。許可を得ないで之を着て、いゝもンだらうか。おもひ切つて着やうか。今日の會は、新しい着物を着てもよい程のだらうか。それこも、伯母達は、この着物は、音樂會の時のに取つて置けといふだらうか。

「着て行かう。伯母さん達が居ないんだから尋く事が出來ないけれど。きつと何こも思ひなさらないわ。たかゞ縞木綿だもの。新しくて飾りがついてゐて。そして桃色だからこそで、さもなけれや、立派な事ありやしない。」こお春は考へた。

彼女は、髪を解いて、波立つ毛を櫛でこかし、リボンで結んだ。それから、靴を穿きかへ、美しい着物を百からかぶつ

た。獨りで、ごうやらボタンをかけだが、春中の中央の三つだけは、おしまに掛けてもらふ積りにした。

こんごは、お春の眼が、大事の〳〵桃色の日傘に移つた。着物の色ごよく適ふし、それに友達にまだ見せた事がない品だつた。學校へ持つて行くには相應しくなかつたが、教場まで持ち込まなくてもいゝ。紙にくるんで置いて一寸他に見せて、歸りがけに翳して來よう。彼女は階下へ行つて、客間の姿見で見た。映つたその姿に我ながらハッとしてしまつた。およそ着物ごしてこの、何ごもいへぬ桃色ギンガム以上の美しいものがあらうか！　お春は、薔薇色の着物の素ばらしい美さに氣をごられて、自分の眼の輝き、頰の冴えた色、垂れた髪のきらめきなどには、一向心付かなかつたのである。まあー　もう一時に二十分しかない、遲くなりさうだ。横手の戸から踊り出て、門の側の薔薇の木から、一輪桃色の花をとつて、學校まで七八町の距離を、忽ちのうちに行つてしまつた。丁度學校の入口のところで、これも息をきらした、きらびやかに粧つた金子しまに出遇つた。

「まあ、春さん！　繪にかいたやうに奇麗よ。」とおしまが叫んだ。

「私が？」ごお春は笑つて「うそよ！たゞ桃色ギンガムの御かげよ。」

「あなたは、平常奇麗ぢやないけれど」ごおしまはなほも續けて「でも普通ごはちがふのよ。……この柘榴石の指輪を御覽なさい。母さんが石鹼水で洗つて下すつたの。まあ、あなたの伯母さんがよく新しい着物を被せて下すつたのね。」

「伯母さん達二人ごも留守だつたから、私尋かなかつたの。」とお春は氣掛かりらしく答へた。「不可ないつて言ふご思つて？」

「おみね小母さんは、何でも不可つていふんでせう。」とおしまが尋ねた。

「えゝ――。でも、今日は特別の會ですもの日曜學校の音樂會程の日よ。」

「え、それや、そうね。」ごおしまが同意した「黑板に、あなたの名が書いてあるし、あなたの旗を皆で指さすんだし、

二人の對話や何かもあつてね。」

この日の學藝會ば、ごれも〳〵上出來で關係者一同が大滿足をした。やり損つた者もなし、泣いた者もなし、恥かしい思ひをする親もなかつた。寺岡先生は、自分の技倆に對する賞讃の聲をきいたが、その賞讃は自分が受けていゝのか、すくなくとも半分はお春のではないかと思つた。お春は、他の兒童以上に澤山仕事をしたわけではないが、ごういふものか目に立つのであつた。村での催し事の折にも、お春をかげに引込ませて置くわけにいかなかつた。この兒を大嫌ひなものでも、この兒が出しやばりだといふ事は出來なかつた。たゞこの兒は何でも即座によろこんでして、ちつとも含差まかつたのである。自分を見せびらかす機會を求めるごころでなく、自分といふものには驚くほど無頓着で、一生懸命、他を前へ出さうとするのであつた。

會がやつと終つた。ぶら〳〵歸りながら、お春は、もう落付いた、靜かな氣持に戻れないやうな氣がした。今夜は、課業の復習はしなくてもよいし、明日ジャムを拵へるのを手傳ふのだと思つても、それが厭でなかつた。彼女の精神の中に光明が漲つてゐて、恐怖の念など生存する餘地がなかつた。空には濃い雲が叢がりて出て來たが、傘がさせて嬉しいと思ふ外に、彼女は氣にも留めなかつた。彼女は、大地を歩いてゐるのも、人間界にゐるのだといふ事も忘れてゐたが、煉瓦の家の、横庭に入つて、おみね伯母さんが、入口に行んでゐるのを見た時、突然此世に戻つて來た。

七　凋れた薔薇

おみねは、およねに對つて、

「やつと歸つて來た……一時間も遲くれて。も少し遲からうもんなら、夕立に遇ふのに。彼女は先の事なんか考へないんだから。そして、まあ、いろんな惡い事をした上に如何だらう。あの新しい着物を着飾つてさ。父親の舞踏學校式の足

取りで、まるで演劇でもしてるやうに日傘をふりまはしてやつて來たよ。いゝかい。およね、私やお前より年上だから、私が思ふ存分言ふンだから、もしそれが厭なら、小言がすむまで臺所にいておいで。こゝへおいでお春。話してきかせる事がある。あたり前の學校の日に、何だつて許可を受けないで、よい新しい着物を着たのだへ。」

「御晝の時に、きくつもりだつたんですけれど、伯母さんは宅にいらつしやらなかつたから、きけなかつたんです。」

「そんな積りはなかつたんだらう。誰も居なかつたもんだから、着たんだ。……伯母さんが着せないのはよく承知して居ながら。」

「伯母さんが着せないと判然私に分つて居れば、私、着やしませんよ。」とお春は、作り事を言ふまいと努めて「でも私、判然分らなかつたし、思ひ切つて着てもいゝ程の事があつたんです。今日は、學校で、ほんとの展覽會といつてもいゝ位のがあつたので、伯母さんが可いと仰るかとも思つたんです。」

「展覽會だ！」とおみねは、馬鹿にしたやうに怒鳴つた「お前だけでも大した展覽會だ。その日傘も展覽さしたのかへ。」

「日傘は、馬鹿げてるたの。」とお春は垂首れて白狀した。

「でも生れて始めてこの傘と色のよく合ふものが出來たんでね、桃色の着物と一所にすると大變奇麗なんですもの。おしまさんと私とで「都會の娘と田舍娘」つていふ對話をしたんですよ。そして、私家を出かける途端に、この傘は、都會の娘に丁度いゝと思ひ付いたんです。やつぱり丁度よかつたわ。伯母さん、私この着物をよごしませんでしたよ。」

「何が惡いつてお前の狹い裏表のある遣り方位惡いのはありやしない。」とおみねは冷やかに言つた。

「それにお前のした他の事は如何だい。まるで魔に取つかれたやうだ。表階段からお前の室へいつたらう。隱さうたつて隱せるもんか、中途にハンケチを落して去つたんだもの。そしてお前の室の窓の網戸を明け放しにして置くから、蠅が内中に入つて來たわね。御飯を食べればつて跡片付けをするぢやなし、御皿一つ仕舞ひはしない、おまけに十二時半

から三時まで横手の戸を締りもしないで置くんだもの、いくらでも人が入つて何か持つてゆかれる！」

お春は、自分の罪の數々を聞きながら、ドカと腰を掛けてしまつた。ごうして、自分は、かう投げやりなんだらう？言譯のたゝない罪を、言譯しやうとするうちに涙が出て來てしまつた。口訖りながらお春は言つた。

「私、惡うございました。學校の裝飾をしゝ居て遲くなつたものだから、走けて歸つて來たのです。そして一人で着物を被るのに骨が折れて、御飯を一口しか食べる暇がなかつたの。そして一番あとで、跡片付をして戸締りをしやうと、ほんとに〳〵思ひかけた時に、時計を見たら、その時すぐ行つても列の中に入れるかごうだか分らない位だつたんで、こんな日に遲刻して、牧師さんの奥さんだの、御醫者さんの奥さんだの、學務掛りの人だのゝ居る處で、黑點をつけられるのは厭だと思つたんですもの。」

「今更泣いだつて騒いだつてしやうがない。濟んじまつた事は仕方がない。後悔先に立たずさ。自分のほんとの家でもない家に居るんだから、成る丈面倒をかけないやうにと心掛けるンぢやなくつて、お前のは、どうしたら、私達を困らせられるかと一生懸命になつて居るやうだ。着物からその薔薇の花を御取り。汚染が出來てるだらう、御見せ。濡れたピンで錆だらけの孔が明いてはしないかへ。汚染にはなつてゐない。心掛けがよかつたんじやなくて運が好かつただけだ。花だの、縮らした髪だの、髮飾りだの、氣取つた體裁だのとお前のにやけ父親みたやうなが、伯母さんはもう堪らなく嫌ひだよ。」

お春は、急に首を上げた。

「伯母さん。私は出來るだけこれからよくします。何か言はれたらすぐその通りにします。戸締りも氣を付けます。ですからごうか、お父さんの惡口を言ふのはよして下さい。お父さんは、ほ……ほんとにいゝお父さんだつたんです。……さうなんです。それをにやけ男なんで言ふのは卑劣です。」

「生意氣に口答へなんかするな……ひとを卑劣だなんて言つて。お前の親はね、自惚のつよい、御めでたい、意久地なしだつたのさ。他人は言はれるより、伯母さんの口から聞い方がいゝんだ。お前の母さんの御金を費つてしまつて、七人子供を押付けて死んでしまつたのだよ。」

「七……七人いい子供を置いてくだけだつて手柄だわ。」とお春は泣いた。

「他の人が食べさせたり、着せたり、學校へやつてやるんぢや、あんまり手柄でもないさ。お前、二階へいつて床に入つておしまい。そして明日の朝まで、そうしているんだよ、パンと牛乳を、鏡臺の上に置くから、明日の朝御飯の時まで、物音一つ立てることはならない。……およね！　走つていつて布巾をお取り込み。物置の戸を閉めて。今に大夕立がやつてくる。」

「大夕立は今すんだんぢやないの。」とおよねは姉の命令を果しに出かけながら靜にいつた。「姉さん、私はめつたに、私の考を述べることはいけないけれど、連造さん（お春の父）の事をあんなに言ふのはわるいでせう。あれは、あゝいふ人だつたんで、別の人になりやうはないんです。とにかくお春の親で、おあさは優しい良人だつたと、いつでもいふぢやありませんか。」

「フン、死んだ亭主はよい亭主ときまつてゐる！　だが、時々は事實を持ち出して風にあてないといけない。お春は、親父から受けついだわるい氣質を捨てゝしまはないうちは、祿なものになりやしない。あれだけ言つてやつて、いゝ事をしたと思ふ。」

「そうでせうよ。」とおよねは、年に幾度と數へる程珍しく思ひ切つた勇氣を出して「でもね、姉さん、あれは不作法で、不心得な事でしたよ。」

丁度その時、家を震動させる程の大雷が鳴り轟いたけれども、今のおよねの一言が、おみねの心にグワンとひゞいた程

にはおみねは感じなかつた。

お春は、力なく裏階段を登つて、自分の寢室の戸を閉め、愛しい桃色ギンガムの着物を、慄へる手で脱いだ背中の外れにくいボタンに手を伸ばす合間に、木綿のハンケチを堅く丸めて、眼を拭いた……あんな思ひをして着た晴衣に涙がかゝつてはならないので。それからその着物の皺を伸し、衿の白裝る壓し縮めて、憂世の辛さを一しやくり泣いて箪笥の抽出しに納めた。枯れ凋んだ桃色の薔薇の花が床に落ちたのを見て、お春は「嬉しかつた今日の日に似てゐるわ」と、心で思つた。そしてこの薔薇が自分が自分の生活の象徴だと悟つて、桃色ギンガムと一所に抽出しに仕舞つた。悲しい思出の多い今日の出來事を葬つてしまふ心組で。これが如何にも此兒のこの兒らしい所であつた。

お春は、髪をいつもの二つのお下げにし、他所行きの靴（幸に伯母さんに見付らずにすんだ）を脱いだ。その間に、この家を出て、自分の實家に歸らうといふ考が熱しかけて來た。實家で、悦んで迎へ入れてはくれまい……そんな期待はないが……でも、自分は、家で、母さんの手助けをして、花姉さんを代りにこゝへよこさう。「姉さんだつて思ひ知るだらう。」とお春は、口惜しまぎれに一寸そんな事を言つて見た。それから窓際へ行つて、山の邊りの電光がきらめき、雨の雫が、避雷針を追かけつこをして傳はつて行くのを眺めながら、しきりに思案をしてゐた。「あんなに晴やかに今朝は夜が明けたのに！　赤々と御日樣が出たから、窓の闌に倚りかゝつて、學課の復習をして、そして美しい世界だと思つたのだつけ。あの午前中の輝やかしかつた事。きたない何の飾りもない教場を花の家に變へたり、下山の双生兒の暗誦を上手にやらせたので、寺岡先生が喜んで下すつたりしたつけ。それから選ばれて黑板の裝飾をしたり、烟草の箱からコロンブスの繪を畫かうと思ひついたりして、一同が拍手してくれた時の嬉しかつた事！　それから午後つたら！　まづ、金子おしまが「繪みたいに奇麗よ」と賞めてくれたのが始まりで、得意の事ばかり續いたつけ！

お春は、學藝會にあつた事を順々に心の中で繰返して見た……ここに自分とおしまとの對話を。自分の思ひ付きで、青

葉に包まれてるストーブを、草の土手のつもりにして、田舍娘がそこに座を占めて、羊の番してゐるやうにしたつけ。その御蔭で、おしまが落付いて、これまでになく上手に暗誦をしだのだつた。それに、おしまが柘榴石の指輪を貸してくれて、都會の娘が日傘を擴げて、女牧者の近くに來るときに、その指輪が光つてよからうと言つた。なんとまあ、あの女は大氣なのだらう！　おみね伯母さんは、田舍から招びよせた姪が、學校で、よく出來たのだから、喜びなさるかとも思つたのに、これに限らず、何をしても、喜びなさりさうにもない。

明日、幸兵衛小父さんの乘合馬車で、錦ヶ森まで行つて、お安さんの家から、ごうかして家へ歸らう、だが、よく考へて見ると、伯母さん達が、さうさせて下さりさうもない。ぢや、いゝわ。今、家を脱け出して、幸兵衛小父さんとこに泊めてもらつて、明日の朝、御飯前に出てしまはう。

お春は、それ以上考へても見なかつた……困つた子で。さつさと一番着古した着物を著、寢衣と、櫛齒、磨楊枝を一包にし、窓からソウと出た。この兒の室は、L字の曲り角に當るところにあつて、窓も地からさう危いほど高くも無かつた。もつとも此時のお春の心持では、いくら高くつたつて思ひ止まる筈はなかつたのだ。が雨樋を掃除するつて屋根へ登つた人が、お春の窓と裏緣の屋根との中途に、足止りに附けて去つた棧があつた。お春は、茶の間のミシンの音と、臺所の肉を刻む音とを聞いて、伯母さん達の所在を知り、窓から這ひ出て、避雷針に摑まり、もつてこいの棧のとこまで辷つて行き、裏緣の屋根へ出て、忍冬の垣を梯子にして降り、これから先をどうしやうと考へもせず、大雨の中をドン〳〵往來を飛ぶやうにして行つた。（以下次號）

第二十三卷　幼兒の教育　第七號

目次

本誌の擴張に就て　會長　茨木清次郎…二
プロジエクト法と幼稚園の作業　東京高等師範學校教授　乙竹岩造…四
教育問答（一）　主幹　倉橋惣三…七
子どもの惡癖と僻み　天野誠齋…一四
初夏の幼兒の保健に就て　東京帝國大學講師醫學博士　太田孝之…二〇
夏の自然（季節の科學）　東京女子高等師範學校教諭　堀七藏…二四
童話　可愛らしい光姫（ヒカルヒメ）たち　よしを…二八
兒童藝術と彫塑展覽會　讀賣社　朝隆其明…三二
私の子供の繪　東京女子高等師範學校助教授　山形寛…三六
石鹸玉（シヤボンダマ）遊びの玩具いろ〳〵　東京女子高等師範學校講師　藤五代策…四五
童話　かけくら　作歌　茂木由子…四八　作曲　萩原英一
萬國幼稚園協會案幼稚園要目（續き）　本誌記者…五〇
英國其他諸國に於ける保育學校の近況　本誌記者…五七
長編小說　お春　東京女子高等師範學校教授　岡田美津…六〇
雜報　記者…七四
日本幼稚園協會會員名簿　…七五

第二十三卷　幼兒の教育　第八號

目次

東西洋の子守唄　文學博士　松村武雄……二
ある奥さんとの話　主幹　倉橋惣三……八
子供の心　天野誠齋……一五
衛生　子供の夏の旅行に際して　醫學士　竹内薫兵……二三
途上劇　子供ずき　K　M生……二五
子供に塗り繪と貼り繪させる　東京女子高等師範學校附屬幼稚園　及川ふみ……二六
童話　小さい音樂家　山崎みつ子……二九
童謡　大きなお日樣　作歌　茂木由子　作曲　萩原英一……三三
律動遊戯　大きなお日樣・かけくら　土川五郎……三四
兒童彫塑展覽會を看て　倉橋生……四〇
詩　生長する環境　橋爪健……四二
家庭製作おもちや箱から　東京女子高等師範學校講師　藤五代策……四四
鳴く蟲の話　東京女子高等師範學校助教授　平島權藏……四七
萬國幼稚園協會案幼稚園要目（續き）　本誌記者……五一
海外記事　幼稚園・小學校の初等年級のプロゼエクト　本誌記者……五七
長編お小說　春　東京女子高等師範學校教授　岡田美津……六一
雜報　記者……六六

編輯室より

雷つたとて涼しくもなるまいが、これが人間か、暑い〳〵と言ひ暮してゐる内にも「秋來ぬと目にはさやかに見ねれども」はや朝夕は流石に涼風が秋をなぶる。昔しの武藏野の原、今はたとへそこに鐵筋コンクリートのいかめしい建物が窓の目をみはつてゐても、どこかしらちよつとした草叢があつて、蟲が秋を唱つてゐる。「川風の涼しくもあるか打寄する波と共にや秋」が來て人間はみな暑い頃に吸ひ込んだ熱氣を吐き出してほつとする。關節が延びかゝつたやうにだるくなつたからだも緊張する。そしてこれからが讀書の時季に入るのです。編輯室も本年は暑さに充分苦しめられましたが、勞力は酬ひられてみな樣の前に一歩〳〵と內容の充實した記事を提供することが出來るやうです。

幼稚園要目は本號を以て完結しましたから、來月號からは馬場定一先生譯の幼稚園事項の續きを載せます。

定價表

冊數	定價	郵稅
一冊	金參拾五錢	金壹錢
六冊(前金)	金貳圓拾錢	不要
十二冊(前金)	金四圓貳拾錢	不要

廣告料

表紙前附	金七拾圓	一頁以下御斷
表紙裏附	金七拾圓	同
普通面一頁	金四拾五圓	同

御注意

□本誌購讀御希望の方は定價表により振替貯金で御送金下さい(東京四六壹壹壹番敎文書院)

□前金切れの節は帶紙に「前金切」と致します

□郵券送金の節は一割增で一錢切手に願ひます

□本誌の一切は敎文書院宛御照會下さい

大正十二年八月二十八日納本
大正十二年九月一日發行

第二十三卷第九號

東京女子高等師範學校內日本幼稚園協會

編輯者 倉橋惣三
發行者 越元新吉
印刷者 東京市京橋區木挽町二ノ十三 石上文七郎
印刷所 東京市京橋區木挽町二ノ十三 敎文書院印刷部

無斷轉載禁

發行所 東京上野公園寬永寺坂下(上根岸八十八) 敎文書院
電話下谷三〇四七。一九五一番
振替東京四六一一一番

東京一大助教授　文學士　阿部重先生著

再版

藝術教育

藝術教育思想の發達に筆を起しそれに關するあらゆる學說を網羅し最後にその手段と方法とについて詳說してゐる。藝術教育の聲高き折柄教育家諸氏の御一讀を希ふ。

四六判　背皮上製
定價　參圓參拾錢
送料　九十錢

東京帝大講師　文學士　上村福幸先生著

三版

知能測定法

本書は個人的測定と團體的測定の兩方面に亙り知能測定の原理と方法とを叙述せるもので教師の實地練習の爲めに殊に豐富なる實例及び問題を加へ其の施行法を懇切丁寧に說いたものである。

四六判　背皮上製
定價　五圓參拾錢
送料　廿七錢

醫學士　竹內薰兵先生著

愛兒の育て方と病氣の手當

四六判　上製
定價　貳圓參拾錢
送料　十七錢

東京神田永富町八　教育研究會　振替東京五八壹八〇番

◆家庭衛生の必讀書類◆

東京女子醫專校長
吉岡彌生
育兒三年
結婚より育兒
定價一圓三十錢

醫學博士
高木兼寛
體力養成
實驗强健法
定價一圓三十錢

育兒の友主筆
天野誠齋
胎教より小學迄
子供しつけ方
定價一圓三十錢

ドクトルメヂチーネ
長濱繁
醫者の來る迄
素人應急手當
定價一圓三十錢

東京至誠病院長
吉岡彌生
家庭衛生
婦人一生の心得
定價一圓三十錢

發兌 東京日本橋人形町通 振替東京五〇六七番 東盛堂
賣捌 全國書林

最新科外少年少女叢書

島崎藤村著
童話集 幸福

文藝界の耆宿藤村先生が、愛兒のために書かれた創作童話です。純眞な詩情の溢れた名編。

淀川茂重著
兒童理科 星の世界の話

晴れた夜空にかゞやく大小無數のお星樣は何を皆樣に語りかけるでせう。科學的お伽話。

若山牧水著
童謠集 ちいさな鶯

短歌壇の第一人者若山先生が、子供の心を歌はれた美しい、樂しい童謠を集めた作曲附です。

柏井滋著
すぐ覺へる 樂譜と聲樂手引

西洋音樂の知識を得るに最もよい手引。やさしく正しく、一般的の知識を與へる樣にかゝれたものです。

山崎斌著
長編童話 すもゝの樹

創作壇の新人山崎先生の面白い、高尚な、純眞な、情緒の滿ちた長編童話集を御讀下さい。

山根幹人著
兒童知識 活動寫眞研究

活動寫眞は世界中での人氣を集めてゐます。活動寫眞の一般的知識は、本書に集まつて居ます。

〔定價各金五十錢送料各六錢〕 四六判 三方金美本

發行所 東京市神田區三崎町一丁目二番地 弘文館
振替東京四九六八・電話神田三七三五

第六十八版

吉兒吉結婚より育兒迄

三年糸

東京女子醫學專門學校長
東京至誠病院長
吉岡彌生女史著

中判美裝
天金箱入
金壹圓參拾錢
送料八錢

本書は刀圭界の女醫たる吉岡彌生女史の記述されたるものにして、婦女として心得べき結婚生活の初步より育兒法に至る迄、生理衛生を懇切丁寧に說述一般家庭の注意を說く。本書の項目を擧げれば左記の如し。一婦人の衛生、結婚に心得べき重大注意、婦人の病氣の心得、姙娠と產婦の注意、姙娠中罹り易き脚氣豫防法產兒は如何にして取扱ふべきか、嬰兒に與へる牛乳、結婚には婦人の自覺が大切、子女平常の身嗜み、花嫁花婚の健康調査、醫學上より見たる美容法及び四ヶ月の育兒法、其他數十條に說述せり。

磯村春子著

最新家庭のしのみもの

△菊判和裝頗美本　△定價金一圓二十錢　△送料金十三錢

本書を御覽になれば、誰方にも容易く新らしい家庭向きの編物を作る事が出來ます。本書には、第一編を準備第二編を實習に區別して說明してあります。準備では、用具や材料の名稱とか使用方法其の他一般の編方の心得を詳說し、實習では（一）帽子類の編方（二）涎懸類の編方（三）手袋足袋類の編方（四）子供手袋類の編方（五）大人用手袋及靴足袋類の編方（六）小供用肩懸類の編方（七）婦人用ショール類の編方（八）手提袋類の編方（九）ネクタイ類の編方（十）前懸及腹懸類の編方（十一）小供服上下編方（十二）兒童用洋服類の編方（十三）オーバセータ類の編方（十四）ズボン類の編方（十五）チョッキ類の編方（十六）花瓶敷編方（十七）テーブル掛の編方（十八）レースの編方等、其他種々珍らしい新奇な編方を澤山敎へてあります。

發兒　東京人形町通六〇　振替東七五一　東盛堂　電話濱町一二四一番　電話下谷一九一五番

天野誠齋先生著

乳兒の育て方 一編
幼兒の扱い方 二編
兒童のしつけ方 三編

羽二重表紙新型箱入美本
正價各金貳圓
送料各拾貳錢

生後から三歳迄
四歳から小學二年迄
小學二年から六年迄

實驗から出た著者三十年苦心の育兒叢書

我國の婦人は、子供の病氣と治療に對する手當の知識が薄いために、子供の死亡率が世界各國中で日本が一番多いと云はれてます。是れは大部分が母親や諸姉が斯道の知識に乏しいのが最大の原因です。

著者は育兒專門家として、我醫學界に又婦人界にも御馴染の愛兒教養に對する實地の研究家で、最近の嚴ましい育兒問題に對して、三十年の實驗を悉く發表したる、母への指針として絶好のものであります。

發行所　東京上野公園下　寛永寺坂　教文書院

電話下谷三〇四七番
振替東京四六一一番

東京女子高等師範學校附屬幼稚園保姆　阪内みつ子先生著

子供の遊ばせ方

四六版美本　―近刊―

子遊供をばせる

ことは中々難しいが又愉快なものである。

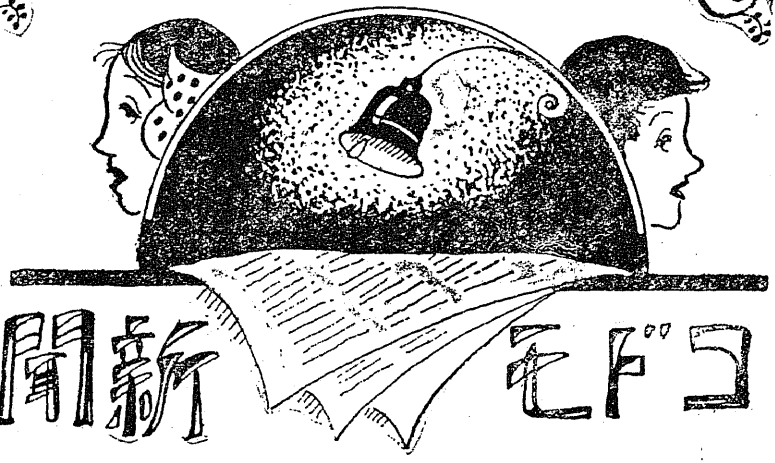
幼兒教育の理論と實際に精通した著者の、子供に對する遊ばせ方の研究書であります。學校でも家庭でも備ふべき良書として御勸めします。

目次

子供を遊ばせるといふ意義
子供を遊ばせるに大切な條件
子供の好む遊びの種類
子供の好む玩具の種類
玩具選定の標準
子供を遊ばせる方法
室内遊び
團體遊び
お話
個人的遊び
室外遊び

以下數十項

發行所　東京上野公園寛永寺坂下　教文書院　電話下谷三〇四七番　振替東京四六一一一番



◇生きた教育によつて、ほんとうの人間を作る時代が參りました。本紙はこの貴き使命の下に生れたのです。

◇新らしき時代に適應した常識的教養を兒童に與へるために、どんなにコドモ新聞が努力してゐるかを見て下さい。

◇本紙は日本に於ける唯一の週刊のコドモ新聞です。

定價
一ケ月部（郵税五厘）四十錢
六ケ月（送料共）同　二圓二十錢
一ケ年（同）四圓二十四錢

東京市神田區美土代町二ノ一
發行所　コドモ新聞社
振替東京五二七五七

橋爪健著詩集

合掌の春

處女詩集
定價一圓二十錢
大正十一年刊

午前の愛撫

第二詩集
定價一圓八十錢
大正十二年刊

桃色の季節

薔薇詩集
第一卷
近刊

著者曰く

これらの詩集は私の甘酸ゆい抒情詩時代の紀念標である。忘れがたい學生々活の唇氣樓である。『合掌の春』を一高時代の夢のみの王國とすれば、『午前の愛撫』は大學時代の多少理念を混へた世界である。『桃色の季節』は少女詩集ともいふべきもので、私の裡のフラウエン・ゼーン（女性心情）が歌ひ出た遙かなる思慕の聲である。

發行所　東京上野公園寛永寺坂下　教文書院　電話下谷三〇四七番　振替東京四六一一一番

新刊

木村鷹太郎先生著

評傳詩集バイロン

バイロンの紹介者として、著者の獨特造詣は本書に「海賊」「フレンド」「カイン」其他數種の名篇を譯述され益々譯者の筆致を高めんとす。本書をバイロンの偉大なる人格と名譯を推賞せん爲め、最も裝飾に意を用ひ、空前の美裝として著したれば必讀の良書のみならず家庭必備書たり。

賣切れ中の處 増刷出來

洋裝 天定價送
金頗る美本 四圓五十錢
金價四圓料拾二錢

最新刊

木村鷹太郎先生著

星座と其神話

天文地形の變化を著者の研究に依り神話として傳ふへく、前後十ケ年の歳月を結晶となして本書を生み、學界の爲め提供せんとす。本書の價値は著者の實際研究の根本なれば、斯道研究者は勿論、振假名を付したれば一般家庭科學知識として必讀すべき良書たり。

申込引受

洋裝 天定價送
金頗る美本 四圓五十錢
金價四圓料拾二錢

發兌 東京日本橋人形町通 東盛堂 振替東京七〇五六番

賣捌 全國書林

理學博士 山口鋭之助先生
文學博士 藤岡勝二先生 監修
教文書院編輯部編纂

カーレント學生參考書

現代學生知識の泉源!!
豫習復習受驗の要書!!

學生の良師となれ
簡にして要を盡せ
確實にして權威あれ
學習に興味あらしめよ

これが本書編纂のモットーである。

近時諸種の學生參考書が續々と出版されるが、事備不正確なものが多く、學生諸君をして其選擇に迷はしめるは吾人の最も遺憾とする所である。吾がカーレント參考書は特に是等の點に着眼して前條のモットーに基き、理學博士山口鋭之助、文學博士藤岡勝二兩先生監修の下に、各々專門家之を分擔し鋭意完成したる模範的良參考書にして、豫習、復習、受驗に必要缺くべからざるものである。

日本地理 上下二冊
外國地理 上下二冊
物理學 上下二冊
化學 上下二冊
幾何學 上下二冊
代數 上下二冊
日本史 上下二冊
西洋史 上下二冊

東洋史 一冊
國史解釋法 一冊
英文 一冊
地理概論 一冊
動物學 一冊
植物學 一冊
鑛物學 一冊
生理衛生 一冊

最新ポケット活字採用
正價各冊金四錢
透視ポケット各冊五錢

發行所 東京上野公園寛永寺坂下 上根岸八十八番地 教文書院 (振替東京四六壹壹壹壹番 電話下谷三〇四七番)

定價金三十五錢

明治三十四年一月二十八日第三種郵便物認可
第二十三卷第九號(毎月一回一日發行)
大正十二年八月二十八日納本
大正十二年九月一日發行